

イナズマイレブン外伝  
——New Generation——  
——（再構想版）

slimy

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

茨城県で生まれ育った弓川一矢は、生粋のサッカー少年。「世界一のサッカー選手になる」という果てしない夢を原動力に、努力を重ね強豪ジュニアチームのキャプテンの座を射止めた。しかし、ある出来事を機に弓川は、サッカー選手としての道を自ら閉ざした。

中学生となり、新たな人生の出発地点に立つ弓川。そんな折、部員集めに奔走する弱小サッカー部とそのキャプテン・若園翔と出会う。その出会いは、弓川が夢見た遙かな頂へと繋がっていた――！

（本作は「イナズマイレブン——New Generation——」の一部の展開や登

場人物等に修正を加えた再構想版です)

# 目次

第1話	弓川一矢	1
第2話	勧誘の嵐	12
第3話	進むべき道	26
第4話	修應中サッカー部、初日	41
第5話	始動	55
第6話	両軍見える	69
第7話	悪夢の30分間	93

## 第1話 弓川一矢

季節の変わり目に取り残された冬の風が、弓川ユミカワの頬を舐めていった。

《修應シユウオウ中学校》は茨城県西部に位置する私立中学で、字面には名門校らしい雰囲気があるものの、その実はいたって平凡な中学校だ。あえてここを選ぶ理由があるとすれば、学費が安いということぐらいしかなかった。

4日前に入学式を終え、いよいよ今日から修應中生としての日々が始まる。空は抜けるように青く澄み、通りの桜もちょうど満開で、おあつらえむきの朝だ。しかし弓川の心は、微動だにしなかった。

自宅から20分ほど自転車を走らせると、目的地に到着した。校門を抜け、体育館横の駐輪場に一直線。学年ごとに指定されたスペースに停めて、昇降口へ向かった。クラスは事前に通達されていたので、真新しい上靴に履き替え、迷うことなく教室に足を向けた。

☆

1時限目は各々の自己紹介に費やされることとなった。まず担任から始まり、続いて出席番号順に名前、出身小学校、好きなもの、頑張りたいこと云々を発表する。弓川は

最後だった。特に興味も湧かなかつたので名前以外は聞き流し、大人しく自分の番を待った。

いよいよ指名を受けると、返事をして立ち上がった。

最後のクラスメイトは、どんな人なんだろう？

そんな視線を一身に受けて、弓川は少しうんざりする。

「弓川<sup>ユミカワカズヤ</sup>一矢です。人並みの人生を送れるように、頑張ろうと思います。1年間よろしく」

弓川は、それだけ言つて腰を下ろした。ふいに教室を見回すと、さきほどまでの和気あいあいとした空気はどこへやら、何とも言えない雰囲気<sup>フウキ</sup>が漂つていた。担任がフオーに入つたおかげでその場は何かなくなつたが、それからというもの、弓川のことを喋つているのであるうひそひそとした声が止むことはなかった。

その後、2時限目、3時限目と消化していき、昼休憩の時間になった。

修應中には購買部がある。クラスのほとんどの生徒がそこへ走るなか、弓川は持参した弁当を鞆から引つ張り出し、包みを広げた。

慌ただしい一日だった――。弓川の口から、ため息がこぼれた。

ようやく落ち着いていた時間を過ごさせる。そう思つて弁当箱の蓋を開けようとしたとき、目の前に人影が現れた。

「な。一緒に食ってもいいか？」

弓川は顔を上げる。

少年——イヌマキリキ犬巻力は、右手の弁当箱を持ち上げてみせた。他のやつと食べばいいだろ、

と弓川は言いかけたが、教室に残った数名は既にグループを作っていたことが分かる  
と、そうは言えなくなつた。しぶしぶ頷くと、犬巻は嬉しそうに椅子を引つ張つてきて、  
弓川の隣に座つた。

面倒だと思いつつ、弓川は黙々と箸を口に運ぶ。

「あんな自己紹介するやつ、初めて見たよ」

犬巻は笑つて言つた。

「ま、人並みに生きるっていうのも大変なことだよなあ」

お前が言うともまったく大変そうに聞こえない、と弓川は思う。

「どこ小出身？」

犬巻は唐突に聞いた。

「知つてどうすんだ」

弓川は一定のリズムで箸を口に運ぶ。

「別に。気になつただけ。それでさ——」

その後、犬巻は様々な質問を弓川に投げ掛けた。しかし、ひらりひらりと躲され続け

たため、彼は口を尖らせた。

諦めた犬巻はしばらく黙りこんでいたが、あることを思い出した。

「——そういえば弓川って、神嶋ユナイテッドカシマ  
フットボールクラブ F C ジュニアのキャプテンだったよな」

それを聞いた弓川は、ふいに箸を止めた。

記憶が、脳裏に蘇る。

1年前の夏。液晶テレビに映し出された受け入れ難い事実を目の当たりにし、弓川は病室で独り、慟哭した。

——神嶋ユナイテッドジュニア、決勝戦にて敗れる……。

右脚が軋む。

身が引き裂かれるようだった。今となっては、腹の底からとめどない怒りと無力感がふつつつと湧いてくる。

もう、サッカーは捨てたのに。

スパイクを脱ぎ、二度と履くことはなかった。サッカーに関わるものも、全て処分した。それでもなお、忘れられなかった。

「俺、そのときは野球やってただけだよ。友達に連れられて初めて試合を見に行ったら、はちやめちやに強くてワクワクしたなあ」



犬巻は目を輝かせ、うんうんと頷いた。

「……人違いだよ。あんな負け犬と一緒にしないでくれ」

依然として無表情の弓川から、ただならぬ空気を感じ取った犬巻は首を縮め、小さな声で謝った。それからというもの、チャイムが鳴るまで二人の間に会話が生まれることはなかった。

（そう、俺は負け犬だ——）

☆

この日のスケジュールの最後となる4時限目は、2、3年生による部活動紹介だった。部活動は野球、バスケットボール、陸上競技といったメジャーなものは言うに及ばず、弓道やフェンシング、登山部といった、中学校では見かけることの少ないものまで幅広い。なかには、県大会優勝や関東大会出場をウリにしている部もある。が、いずれも片手で数えられるほどの回数しかない上に、「運良く」勝ち進んだようなものだったので、強豪と呼ぶには至らない。

文化部には、美術部、文芸部、漫画研究部、そしてこれまた珍しい茶道部と華道部が名を連ねている。

新入生は体育館に移動すると、部活動の一覧やPRなどが書かれた冊子を受け取り、部活動に所属するにあたってのあれこれについて説明を受けた。その後、各部門たちに

よる紹介が始まった。

部活動紹介と銘打っているものの、蓋を開けてみれば、出来の悪いコント大会を延々と見せられているようだ——と、弓川は辟易した。ちらほら笑いが起きてはいたが、笑いに造詣が深くない弓川でさえ、面白いとは微塵も思えなかった。微妙に尺が長いことも相まって、つまらなさを助長していた。

何にせよ、弓川は運動部に所属するつもりは毛頭なかったので、冊子の文化部のページをそれとなく読んでいた。

「次に、サッカー部のみなさん。お願いします」

アナウンスが流れると、淡い緑の髪の少年を先頭に、数名が続いて登壇した。

弓川は、目線だけをちらとステージに移した。線が細く、眉は八の字に垂れている。目も泳ぎ、見るからに気の弱いその少年は、青いユニフォームを纏い、左腕に腕章を——キャプテンマークを巻いていた。

あれが、サッカー部のキャプテン？ それに、部員は11人にも満たないじゃないか。弓川は、鼻で笑った。

「……、こんにち、は。しゅ、修應中サッカー部、です」

マイク越しでも声はか細く、露骨に震えていた。1年生たちはざわつき始めるが、それからキャプテンはぼそぼそと喋り続けた。そんな彼に業を煮やしたか、ステージに

向かって右に立っていた上背の少女が亜麻色の髪を揺らし、頼りなさげな背中に向けていきなり腕をフルスイング。鞭で打ち据えたような甲高い音と、短い悲鳴が体育館に響いた。

一瞬、水を打ったように静かになり、遅れて笑いが起こるなか、弓川は見るのも恥ずかしくて顔を手で覆った。

「翔シヨウくつ。なにビビってんだよ！ 試合に比べりやなんてことねえだろ！」

うずくまって悶絶するキャプテンの目には、涙が浮かんでいた。

「だ、だからって、背中にビンタはないだろ……。しかも全校生徒の前で……」

「いいりアクシヨンだ若園ワカヅーっ！」

さきほど背中をビンタされたキャプテンに。

「姉久保アネクホとは良いコンビだなーっ」

さきほど背中をビンタした少女に、それぞれ声が掛けられた。

ジャージを着た中年の男教師が、場を鎮めるために喚き散らすものの、なかなか笑いは収まらなかった。去年も同じようなことがあったのだろうと容易に推測できた。

弓川の眉間に皺が寄る。舌打ちすると、再び目線を冊子に落とし、時間が過ぎるのを待った。

ステージでは、小柄な少年がよろよろと立ち上がる若園を支えていた。

「……さ、サッカー部は、本当にピンチなんです」

自分でも分からなかった。弓川は、いつの間にかステージに立つ若園に注目していた。体育館中に響く笑い声に掻き消されそうなその声が——若園の悲痛な叫びが、弓川の耳には届いていた。

「しょ、初心者でも、経験者でも……と、とにかく誰でもいいので、サッカー部への入部をお願いします」

☆

「ただいま」

玄関を開けると、台所からパタパタと早歩きしてくる音が聞こえてきた。出迎えたのは、弓川の母——紗矢子<sup>サヤコ</sup>だ。

式台に腰を下ろし、靴を脱ぐ弓川の頭上から彼女の声が降ってくる。

「おかえり。学校はどうだった？」

少し疲れ気味だが、声の調子は明るかった。

「どうも何も……」

弓川は素つ気なく返した。

すると、紗矢子のため息をひとつ吐き、息子の頭をわしやわしやと撫で始めた。これは昔からの、彼女なりのスキンシップだった。

「な、なんだよ、急に」

「どうも何も、じゃないでしょ。友達は出来たの？」

なぜか犬巻の顔が浮かんだ。弓川はすぐに振り払って、母に向き直る。

「友達なんて、いなくたって生きていける」

紗矢子の腕をどけると、廊下を進んだ。

「着替えてくる」と弓川。

突き当たりの階段に足を掛けたのと同時に、紗矢子の声が肩越しに飛んでくる。

「サッカー部には……入らないの？」

弓川の脚が止まった。母の声もまた、あの若園のように悲痛であった。

二人の間に沈黙が満ちる。

「……言っただろ。もう、サッカーはやらないって決めてんだ」

そう言って弓川は2階に上がっていった。

残された紗矢子は、見えなくなった息子の背中を、しばらく追いかけていた。

☆

弓川は、茨城県東部に位置する神嶋市で生を受けた。

この神嶋市は、茨城県に初めてサッカーが持ち込まれた街であり、それに際して創られたのが神嶋蹴球同好会——後の神嶋ユナイテッドである——だった。以降、神嶋市

はサッカーと共に発展していくと同時に、茨城県におけるサッカーの総本山にもなった、という歴史がある。

そんな《サッカーの街》に生まれた弓川は、やはりというべきか、生まれたときから遊び相手はボールだった。片時もボールを離さず、取り上げられようものなら大泣きして抵抗した。成長すると、同年代の子どもたちを大勢誘って近所の公園に行き、一緒にボールを蹴って毎日を過ごした。

当時の弓川は、サッカーのルールなどまるで知らなかった。それでも、ボールを蹴ること、仲間と一つの目標に向かうことの楽しさを、幼心に感じていた。

ある日のこと。両親の都合が合ったので、一家は試合観戦に行くことになった。会場は神嶋スタジアム。対戦カードは、神嶋ユナイテッド対欧州の某ビッグクラブという、世紀の一戦。

この試合は親善試合だったが、生の観戦が初めての弓川にとっては些細なことだった。

そして、この試合を観戦した弓川は、雷に打たれたような衝撃を受けた。

情熱、エネルギー、闘志、勇氣、夢。

ピッチで戦う選手たちだけでなく、指示を飛ばす監督、ベンチで出番を待つ仲間たち、そしてスタンドを埋め尽くす無数の観客が生み出すそれらが、幼い弓川に大きく作用し

た。

そして弓川は決意した。

——俺は世界一のサッカー選手になる……！

## 第2話 勧誘の嵐

一夜明けても、弓川の気分は晴れなかった。

——サッカー部には……入らないの……？

サッカー、サッカー。

怒りが渦を巻き、肥大化していく。

(俺は間違つてない。ああするしかなかったんだ)

サッカーを捨てる決断を下したその時から、何度もそう言い聞かせてきた。十二分に納得した。そのはずなのに、気持ちがせめぎあっていた。

(あのサッカー部がどうなるうが、俺には関係ねえんだ……！)

☆

「……い、おい」

肩を叩かれ、弓川は我に返つた。振り返ると、犬巻が深刻そうな面持ちで立っていた。

続いて教室を満たす食べ物匂いが鼻につき、昼休みに入っていることを理解した。

ズキズキと痛む頭に手を添えながら、弓川は弁当と水の入ったボトルを取り出す。

「まだ2日目なのに顔色悪いぞ。大丈夫か？」



弓川はボトルのキャップを捻ると、中身を一気に喉へ流し込んだ。

「……気遣い、どうも」

弓川が一息つくくと、犬巻は椅子を引つ張ってきて横に座り、弁当を食べ始めた。

「おい、待て。一緒に飯を食う仲になった覚えはねえぞ」

「俺は心配してんだよ。急にぶっ倒れたらどうすんだ？ 誰か近くに居たほうが良いだろ？」

つき、と右脚が痛む。

神嶋ユナイテッドのチームメイト、監督、コーチ陣、サポーター、家族。支えてくれる者は大勢いた。しかし、自らそれを拒んだ。愚かな選択をしたのは、他の誰でもない自分だということを、弓川は分かっている。その選択が招いた結果も。

彼は椅子の背もたれに体を預け、教室の天井を仰いだ。

「ぐったりしてるところ悪いけど」

犬巻はそう断ってから話を振った。

「部活何にするか決めたか？」

腹の虫が鳴いた。

弓川は姿勢を戻すと、無言で箸を動かした。

「ちなみに俺は野球部にしようって決めてるんだけど、どうかな」

「知るか。勝手にしろ」

求められたので応じたものの、果てしない苛立ちから言葉を返すのも億劫だった。

「でも、他の部も気になるよなあ」

犬巻は首をひねり、唸った。とうとう弓川はだんまりを決め込むことにした。

そんなことはお構い無しに、犬巻は話し続ける。

「弓川。明日から部活見学が始まるだろ？ 付き合ってくれよ！」

「断る」

弓川は食い気味に答えた。

☆

翌日。

6時限目が終わると、弓川は雑踏に紛れて足早に駐輪場へ向かった。到着するなり、辺りを見回して犬巻がいないことを確認する。

犬巻は落胆していたが、付き合う義理も、道理もない。

弓川は、帰って課題を片付け、眠りたい一心で荷物をまとめる。しかし、あるはずのものが無いことに気づいた。自転車の荷台に荷物をくくりつけるためのゴム紐だ。どこかに落としたのかと思ひ探し回っていると、背中に人の気配を感じた。弓川はそれが誰か理解し、大きなため息をついた。

「分かったよ！ 付いて行きやいんだろ!？」

弓川がそう言つて振り向いた先には、犬巻が笑顔で立っていた。その手には、くだん件の紐が握られていた。

かくして、弓川は犬巻の部活見学に付き合うことと相成った。

ちなみに、弓川は文芸部に入ろうと決めていた。「いかにも」といった部員が顔を揃えているのは少し気に食わなかったが、運動部に入るよりはマシだと思ふことにしていた。

始めに二人が訪れたのは、犬巻の第一候補である野球部。強豪というわけではないが、ある程度の成績は収めている。程よい強度の練習と、和気あいあいとした空気が相まって、部員たちの表情は健やかだった。

「少年団を思い出すなあ」

ネットの裏で並んでいると、犬巻は懐かしそうに言った。それを聞いた野球部員が食いつき、二人で野球談義に花を咲かせた。

「君は野球の経験は？」

蚊帳の外に居た弓川は、話を振られるとは思わず、ぼーっとグラウンドを眺めていた。犬巻に肘で突かれて気がつき、

「野球はやったことあるのか、つて」

と教えられた。

「ああ、いや……一度も」

そう答えた弓川は、野球談義が長引くのを嫌い、礼を言うのと犬巻を連れてグラウンドを出た。

「なんだよー、盛り上がったのに」

犬巻は不満を漏らした。

「俺は仕方なくてめーに付き合ってたやっつてんだぞ！ 分かってんのか!？」

そうして二人が言い争っていると、

「そのの。次はどこへ行くこうか迷っているようだな?。」

快活な声が割って入ってきた。弓川は、がなり立てるのを止めるとそちらへ振り向いた。

「ならば、是非サッカー部へ来てくれ!」

ずい、と弓川の目の前に差し出されたものは、勧誘チラシだった。それを手で除けると、紙の束を小脇に抱えた少年が、どこから湧いてきているのか分からない自信を惜し気もなく前面に押し出して立っていた。

きりつと引き締まった顔立ち。欠かさず手入れされているであろう艶のある黒髪。

青いユニフォームから伸びる、無駄を削いだ刀のようにしなやかで強靱な手足。絵に描

いたような美少年である。

が、彼の出で立ちを認めた弓川は、違和感を覚え、ふと犬巻を見た。彼の視線に気付いた大きな瞳が、弓川を見上げる。

そして向き直る。依然、自信に満ちて光る瞳が、弓川を見上げる。  
小さい——。

「バカっ。失礼だろっ」

犬巻が弓川をどついた。口をつけて出ていたらしかった。

「……って。てめーも同じことを思ってたんじゃないかッ」

気付いた弓川は、どつき返した。

横目に美少年を見やると、分かりやすく落ち込んでいた。彼のなかにある触れられたくないところに、渾身のストレートを食らわせてしまったのだった。

「……ま、まあ、とにかく。仲が良くて結構！」

そう言うのと、美少年は気持ちを切り替えるように高らかに笑った。クリーンヒットをもらいながらも立ち上がったそのメンタリテイに、弓川はほんの少し感心した。

「俺はサッカー部3年、ギヤマチヨウスケ岐山彫介。——そして人は俺を、《ガラスの貴公子》とも呼ぶ！」

「へーっ！ かっこいいですねっ！」

犬巻が目を輝かせる。すると岐山の顔が、分かりやすく明るくなっていった。「そうだろう、そうだろう」

岐山が大きく頷く。

「ところでお前たち。サッカーに興味はあるか？」

「はい、ありま——」

「ありません」

弓川は、犬巻に最後まで言わせなかった。

「他をあたってください。それじゃ」

そう言うと、弓川は犬巻の制服の後ろ襟を掴み、無理矢理引き摺っていった。

残された岐山は、ぼかんと口を開けたまま、小さくなっていく二人の背中を見ていた。

☆

続いて二人がやってきたのは体育館。ここでは、バスケットボール部とバレーボール部が分割して練習に使用していた。

小刻みのスキル音が反響するなかで、弓川と犬巻は黙って練習を見学していた。しかし、二人の間に流れる沈黙に嫌気が差した犬巻が、口を開く。

「……どうしてそんなにサッカーが嫌いなのか」

弓川は腕を組み、堅く口を閉ざしたままだった。犬巻もそれ以上の詮索はしなかった。

しばらくそうしていると、二人の体に大きな影が落ちた。何かと振り返ると、青い壁が目の前に聳えていた。

「やあ。新入生、だよね？」

二人の頭上から声が降ってきた。見上げると、色黒の坊主頭が申し訳なさそうに微笑んでみせた。

「お、驚かせてごめん。僕、サッカー部3年の桐葉塊丸キリハカイマルっていうんだ」

中学生離れた巨体からは想像もつかないほどの、物腰の柔らかな雰囲気があった。さっきの小さな貴公子と、どちらがその称号にふさわしいだろうかと弓川は思う。

「ねえ、ふたりとも。サッカーに興味は……」

桐葉は何か気付いたらしく、そこで言葉を切った。

「き、君。もしかして」

「人違いです」

弓川はうんざりしながら、即答した。

「さっきもあんなのところが来ましたが、サッカー部に入るつもりは微塵もありません」

そう言つて体育館を出ようとすると、桐葉が弓川の進路に入った。

「そ、そうだったんだ。でも、そう言わずにさ。せめて見に来るだけでも——」

弓川は舌打ちすると、桐葉をぎろりと睨み上げた。

「興味ねえつて言つてるだろ」

桐葉が、びくつと肩を震わせた。

この大男を迂回するのも面倒に感じて、弓川は押し通ることにした。勝てる見込みは少ないが、肩を当てて退けることにした。半身に構え、桐葉に向かう。

触れるか否か、弓川は力を込めた。しかし彼は分厚い肉の壁ではなく、空を押した。たたらを踏んだ弓川は、体勢を立て直し顔を上げた。

(……なんだ?)

弓川の肩が当たる瞬間、後退りしたであろう桐葉の顔が、青くなっていた。が、特に気に掛けず、犬巻を残して体育館を去った。

☆

駐輪場に着き、自転車のハンドルに手を掛けた弓川は、ため息をついた。

今度こそ犬巻はいない。追ってくる様子もない。

ようやく帰れる。そう思い、自転車を押して校門に向かった。

その時、強風が砂埃を舞い上げ、弓川の目に浴びせかけた。弓川は反射的に目を閉じ



て抵抗した。

(これだから春は嫌いだ)

しようがないとは分かっている、腹が立った。

目を擦って、再び開けると、霞んだ世界の中で何かが前を過った。

(今のは……人か?)

弓川はスタンドを下ろし、後を追った。

そこには、派手にひっくり返った小柄な少女——犬巻や岐山よりも一回り小さい——  
がいた。辺りには紙が散らかっており、弓川はおもむろに拾い上げてみた。

(……またサッカー部か)

紙を手放して踵きびすを返すと、

「ちよ、ちよと待ってほしいによよー」

少女の、舌足らずで気の抜けた声が、弓川の背を捕らえた。

「チラシを集めりゆのを、手伝ってほしいによよー」

むっくりと起き上がった少女は、ずれた眼鏡を直すと、両腕を振って協力を求めた。

「急いでるんで」

と喉元まで込み上げてきたが、それを飲み込む。弓川は頭を搔くと、チラシを一枚一

枚拾い集めていった。

(お人好しだな、俺は)

そうして少女と協力し、黙々とチラシを集めること数分。チラシの山が、無事に少女の手に戻った。

「ありがとーございませしゅー！」

少女は小さな体を二つに折ってお辞儀をした。

「じゃあ、俺は帰るんで」

「あーっ！ 待って、待って！」

再び呼び止められ、弓川は振り返った。

「……まだ何か？」

「君、弓川一矢くんでしょ!? 元神嶋ユナイテッドジュニアによ！」

またこれだ。

弓川の堪忍袋の緒は、切れかかっていた。

「俺は——」

そこで弓川は、突然、ものすごい勢いで引つ張られた——と思う間もなく、地面に顔から突っ込んでいた。鋭い痛みが走る。何が起きたのかを、瞬時には理解出来なかった。

「ああつー！　ご、ごめんによしやいつー！」

うめき声を上げながら体を起こす弓川は、あたま頭を振った。

「い、いきなり何を……！」

起き上がりざまに弓川は少女を睨んだが、臆することなく制服の袖を掴んできた。

「サッカー部に！　来て！　にやのよーっ！」

☆

弓川の抵抗も虚しく、小学生かと思紛う華奢な少女に力負けし、サッカー部室前に連れてこられた。

サッカー部室とそこに隣接するピッチは、修應中敷地内の端にひっそりと設置されている。

ピッチはハードグラウンドが一面だけ。部室はというと、掘つ建て小屋そのものだった。サッカー部の現状を物語るような、あまりにも惨めな姿に弓川は絶句した。ピッチがあるだけまだマシかと思うことにしなければ、倒れそうになった。

「あれ、フタクモ綿雲先輩。1年生連れてきたんだ」

そこへ、後ろで纏めた黒髪を揺らしながら、ピッチから一人の少女がやってきた。ユニフォームも、ソックスも、シューズも、全てが黒で統一されていた。その影響か、ルビーを埋め込んだような瞳がいつそう際立つ。

「そーなによよ、おつるちゃん！」

ひとときわ小柄な綿雲えありのポリューミーな髪が、ふわふわと揺れた。

「あまり乗り気じゃなさそうだけどね」

そういうと黒ずくめの少女——奈落馬阿鶴ナラクバアツルは、品定めするように弓川の顔を眺めた。

「……ま、せつかく来たんなら見ていくといーよー。つまないだろーけど」

それだけ言つて奈落馬は踵を返すと、ひらひらと手を振つてピッチに戻つていった。

入れ替わるように、向こうから青いユニフォームの少年がげんなりした様子で歩いてきた。

(あいつは……)

若園とかいうやつだ。

「翔くーんっ！ 新入部員が来てくれたによよーっ！」

綿雲は、とてとてと走り始めた。

「……おい！ ちよつと待てッ！ サッカー部に入るなんて一言も言つてねえぞッ」

弓川が慌てて後を追つた。

綿雲の明るい声を耳にした若園は、信じられないと言いたげな顔になった。

「ほ、ホントか綿雲!？」

「ホントにやによよー!」

綿雲が若園の周りを跳ね回る。追い付いた弓川と、若園の視線がぶつかった。

「お前が、ウチに入ってくれるのか!？」

弓川は息を整え、言う。

「——入らねえよ」

### 第3話 進むべき道

「わ、綿雲！ 話が違うじゃないか！」

「ホントにやによよーっ！」

わあわあ言い争う二人を前にした弓川は、何だか馬鹿らしくなってきた。

「それにこの子は、弓川一矢にやによよーっ！」

若園の顔色が変わる。おそろおそろる弓川に歩み寄り、まじまじと眺めた。

「……ほ、本当、なのか？」

「ホントもホントにやによよーっ！ その目つき、体つき、正真正銘によ弓川一矢にやによよーっ！」

体つきはまだ分かるが、その目つきとはどういう意味だ、と弓川は眉をひそめた。

くだらない嘘をつくのも面倒になったので、弓川は観念して喋ることにした。

「……ああ、そうだよ。俺は弓川一矢だ。神嶋ユナイテッドジュニアの、惨めな元キャプテンさ」

言い終わると、弓川は自嘲するように小さく笑った。

若園は綿雲と顔を見合わせると、突然膝をついた。

「た、頼む！ 弓川！ どうかサッカー部に入つて……一緒にフットボール・フロンティア F F に出てくれ

！」

フットボール・フロンティア

F F —— 中学サッカー日本一を決める、最高峰の大会。

40年以上の歴史を誇るこの大会で優勝することは、たいへんな栄誉であり、日本全国のサッカー少年、少女たちの夢でもある。

「断るッ」

「ええ!?!」

弓川は、はつきりと言つてのけた。

「サッカーは二度とやらないと決めてんだ。だいたい、助ける義理はねえだろうが」

「そ、そんな殺生な……」

「若園だったか。3年生だよな」

弓川の問いに、若園は頷く。

「他の連中にも言つておけよ。今年は諦めて、来年に懸けるってな」

弓川が吐き捨てるように言うと、若園は跪いたままがつくりと項垂れてしまった。

その姿に、弓川の良心が少し痛んだ。

「……駄目なんだ」

「あ?」

若園の声は震えていた。滴が落ちて、地面に小さなしみをつくった。

「来年じゃ……駄目なんだ」

顔を上げた若園は目を真っ赤に腫らして、弓川は思わずぎよつとした。

綿雲が、若園の背中に小さな手を添える。

「なんで、駄目なんだよ」

と、弓川。

「このサッカー部は……今年で廃部になるんだ」

若園は涙を拭い、一息ついてから語り始めた。

サッカー部は、修應中創立の翌年に設けられた。学校の発揚を目指したものだだったが、試合にはとことん負け続け、チームは弱体化するばかりだった。

部の設立から3年。数十人はいた部員が最終的に2人にまで減少し、部の運営が出来なくなったため、廃部が決定。以来数十年間、サッカー部はその存在すら忘れられていた。

そして2年前。修應中に入学した若園の尽力で、サッカー部が復活。しかし何の因果か、実績を残せずに時間だけが過ぎていき、去年、理事長にこう言い渡された。

——来年、FFとやらに出場できなければ、そして優勝出来なければ、サッカー部の今後一切の活動を禁止する……。



そこまで聞いた弓川は、あまりに無情な決断に愕然とした。

「復活も、認められないのか……?」

若園は頷いた。

弓川は、ピッチの方に目線をやった。奈落馬を含めた4人が、ボールを蹴っている。

「……今、この部には何人いる」

「俺を含めた3年生が5人と、2年生が4人。いま、ピッチにいるのが2年生だ」

F Fは地区予選、県大会を経て本戦に進む。出場には先発の11人に加え、ベンチメンバーは最低でも3人いなければならない、という規定があった。

現状、サッカー部は優勝以前の問題を抱えていた。

弓川は、若園が部活紹介で言っていた「ピンチ」とはこのことかと得心した。

「試合に出られなくても、優勝出来なくても、俺たち3年生は即引退……2年生は転部させられる。——俺たちが、修業中最後のサッカー部員なんだ」

最後の、サッカー部。

「……お、俺の知ったことじゃない」

「頼む! こんな形でサッカー部を終わらせたくない! みんなの居場所を、奪いたくないんだ!」

胸が締め付けられた。

まだ心のどこかに、サッカーをやりたい自分がある。この頼り無げなキャプテンのよ  
うに、仲間のために戦いたい自分がある。

それでも――。

「俺は、やらない」

弓川は踵を返した。

「待ってくれっ!」

肩に置かれた若園の手を、振り払う。

立ち止まって、一呼吸置く。

「捨てたんだよ、何もかも……。俺はサッカーで、仲間を傷付けた」

弓川は、再び歩き出す。もう、誰も追っては来なかった。途中ですれ違った岐山と桐  
葉も、ただ弓川の背中を見つめるしか出来なかった。

☆

弓川の脳裏に蘇ったのは、病室でのことだ。

敗戦が伝えられた後、気取った評論家や戦術家たちが試合について語る特番が始まっ  
た。10連覇の掛かった試合で負けたということ、皮肉にも番組は盛り上がってい  
た。

弓川は聞きたくなくて、濡れた手を弱々しくリモコンに伸ばした。が――

――火村ホムラくんの動きは悪かったですね……。

手が止まり、涙も止まった。

神嶋ユナイテッドジュニアの点取り屋、火村ホムラ竜聖リウセイ。

弓川の同級生であり、仲間であり、互いに認め合ったライバル。

その日、彼は離脱した弓川に代わってキャプテンマークを巻いた。

――火村くんは間違いなくエースではありますが、キャプテンの器ではなかったという事です……。

――ここぞという場面で決めきれないのも問題で……。

違う。そんなはずはない。

絶えず流れてくる、戦友への不当な批評。テレビの向こうの大人たちは、なおも貶め続けた。

弓川は、ずっと近くで見えてきた。だから知っている。こんな評価をされていい男ではないことを。

そして評論家たちは、極めつけに口を揃えて言った。

――弓川くんがいれば、また結果は変わっていたのでしょ……。

弓川のなかで、何かが切れた。以来、弓川はチームに戻らず、火村にも会わなかった。

チームの連覇を終わらせた人間が、どんな顔で戻れというのか。仲間を傷付けた人間に、サッカーを続ける資格があるのか。

どこまでも自分が憎かった。許せなかった。

そして分かっていった。納得できないことを。

(だけど、いまさら俺がサッカーなんて……)

校門を出て数十メートルのところまで、制服のポケットに入れていたスマートフォンが振動した。取り出してみると、それは着信を知らせるものだった。

画面に表示されている名前が目に入り、弓川はどきりとした。

(火村……！)

連絡先を消そうと思いつつも、未練がましく消せずにはいたが、今日こんにちに至るまで電話の一つもしていなかった。

応じるべきか、否か。

迷う弓川をよそに、端末は震え続ける。

俺を待っている――。

弓川は、おそろおそろ「応答」を意味する緑のボタンをタップし、耳にあてがった。

「……もっもっ」

「よう。久しぶり」

どこことなく機嫌の悪そうな声が返ってきた。

無理もない。弓川は項垂れた。

「…………え、と。学校はどこに通ってるんだ？」

気まずい空気が端末越しに流れるが、弓川はなんとか会話を繋ごうとした。

「神嶋学院だよ」

神嶋学院中学校は、県下最強と謳われるサッカー強豪校であり、前年のFF準優勝校でもある。優秀な選手を毎年のように輩出していることでも知られており、サッカー部出身の卒業生はそのほとんどが高校生のうちにプロクラブと契約を結んでいる。

また、過去には影山零二率いる帝国学園に真っ向から対立し、卑劣な妨害に苦しめられながらも激しく抵抗してきたという歴史があるが、現在では両者の関係も修復されている。

そして神嶋学院は、全国でもトップレベルのサッカーを練り広げながらも、FFで優勝杯を掲げられずにいた。そのため、「勝てない強豪」としても有名だった。

「そう、なのか。…………相変わらず凄いな、火村は」

「ああ」

抑揚のない短い返事が来た後には、何もなかった。

どうすればいい。

弓川はあれこれ考え、終着点を見出だす。

「……すまねえ」

沈黙が返ってくる。

弓川は、胸の内を吐露した。

ずつと謝りたかったこと。それでも合わせる顔がなかったこと。

火村は、黙って聞いていた。

「本当に……すまなかつた」

端末の向こうから、ため息が聞こえた。

「……試合前に自滅してチームを混乱させた上に、何も言わねーでサッカー辞めて、神嶋からも出ていくなんてさ」

弓川には、返す言葉もなかった。

「お前がそこまで女々しいやつだとは思わなかったよ」

軽蔑されても仕方がない。それだけのことをしたのだ。

「……ま、俺にいじめのシユミはねーから、これぐらいにしといてやるけどよ。お前、後悔してんだろ」

「ああ……」

「だったら、もう一度サッカーをやれよ。それが筋つてもんじやねーのか？」

もう一度サッカーを——。火村からそんな言葉を投げ掛けられるとは、予想だにできなかった。

「お前言ってただろ？ 息が止まっても走り続ける、世界一のサッカー選手になっても走り続ける——てき」

「で、でも俺は」

「……正直な話」

火村の声のトーンが変わった。

「俺も辞めようと思った」

「え……」

「知ってんだよ。俺に対する評価が悪かったのは」

火村の力の無い笑いが届く。

「だけど……そのまま終わるなんて、悔しすぎるじゃねーかよ」

「……」

「俺は卒業までクラブに残った。そして、神嶋学院でサッカーを続けることにした。あの日の俺を超えるために——お前を超えるために。それが、俺の進むべき道だ」

強い決意が、ひしひしと伝わってくる。

（それに比べ、俺は……）

ひどく情けなく思えた。しかし、情けないまま終わりがたくないという思いが、後悔し  
たくないという思いが、腹の底から湧き上がってきた。

「弓川。本当にサッカーを捨てちまったのか？ 俺の知ってるライバルは、そんな腰抜  
け野郎じゃねーぞ！」

端末を握る手に力がこもる。火村はこういう男なのだということを、今になって思い  
知らされる。

「——そうだな。ありがとう、火村」

「へへ。そうでなくちゃあよ。じゃ、またな」

弓川は、ああ、と返す。彼の瞳には強い決意が宿り、闘志の炎が再び揺らめいていた。

「あ、最後に」

思い出したように、火村が続ける。

「実は俺も、お前に謝りたかった。お前を頼りすぎたことも、決勝に出られなかったお前  
に、優勝を届けられなかったことも……」

「そう、か」

「怖かったんだ。お前からサッカーを奪ったんじゃないかって、ずっと心に引つ掛かっ  
てて……」



「……大丈夫だ、火村。俺はお前を憎んでなんかいない。俺はお前のライバルで、仲間じゃねえか」

弓川は言った。端末の向こうで、火村が鼻をすすり、笑った。

「……応！ それじゃ、またピッチの上で会おうぜ！」

☆

全速力で戻る。二度と後悔しないために。風のように校門を抜け、道を曲がり、サッカー部のもとへ。

部室前に差し掛かると、スピードに乗ったまま自転車を飛び降りた。乗り手を失った自転車が、音を立ててすすり飛んでいった。壊れたかもしれない。弓川はそんなことは気にしなかった。

他の部員は帰したらしく、若園がピッチに立ち尽くしていた。

とにかく弓川は、飛び込むようにしてピッチに入った。

「若園ッ！」

声に気付いた若園は振り返ると、慌てて弓川に駆け寄った。

弓川は立ち上がると、呼吸を整え、若園の目をしっかりと見据えた。

「俺は、サッカー部に入る！」

弓川は、高らかに宣言した。

きよとんとしていた若園だったが、みるみるうちに喜びの色で顔を染め上げ、また涙を流した。

「あ、ありがとう、弓川！」

「——ついでに、俺もサッカー部に入ります！」

聞き覚えのある声だった。弓川は振り向いた。

「い、犬巻!? お前、野球部にするとか言ってたんじゃ……」

「入るとは言っていないぜ。ただの第一希望だよ。それに、お前といると面白そうだからな！」

弓川は苦笑いした。

そして、ずっと胸につかえていたものが解れていく、清々しさを感じていた。

☆

家に着くと、父・晋矢シンヤの革靴が目に入った。普段はもつと遅くに帰ってくるのだが、今の弓川にとっては好都合だった。

入浴を済ませ、久しぶりに3人で食卓を囲んだ。

「話があるんだ」

夕食後、弓川はそう切り出した。

「俺……もう一度、サッカーをやるよ」

紗矢子と晋矢は顔を見合わせ、微笑み、深く頷いた。

「その言葉が聞けて、嬉しいわ」

「ずっと待っていたよ」

すると父は、ある物を持ってきた。

「父さん、それは……！」

「いつか必要になると思って、買っておいただ。一矢のために」

それは、サイズこそ違えど、かつて弓川が使用していたものと同じモデルのシューズだった。

懐かしさと共に、二人の深い愛に涙が溢れた。

「ありがとう……父さん、母さん……っ」

「一矢。何があっても、自分を信じて最後までやり遂げなさい。私たちも、あなたを信じるわ」

父と母は、息子の肩を抱き寄せた。二人の体温が、いつまでも心強かった。

☆

明くる日、弓川と犬巻は入部届を提出。手続きを終え、修應サッカー部員となった。

その日の放課後、二人は部室前にやって来た。

「楽しみだな、弓川！」

「……お前が能天気すぎて、心配になるよ」

そう。このサッカー部には、野放しにできない問題があるのだ。

FFで優勝出来なければ——そもそも予選に出場出来なければ、サッカー部は無く  
なってしまう。部員も、まだ足りない。

前途は多難。しかし、弓川はもう目を背けない。もう逃げない。

部室で、若園たちが待っている。

改めて決意を固めた弓川は、部室のドアに手を掛けた。

「お願いしアす!!」

進むべき道は、見えている。

## 第4話 修應中サッカー部、初日

切れかけの白熱灯が、修應中サッカー部の面々を照らす。

弓川は、過去を思い起こしていた。忘れようと何度も試みた苦い過去。この先もろしてみついで離れないだろう。それならば、どこまでも引き連れていく。受け入れ、乗り越えていくのだ。

眉宇に、決意と覚悟が漲る。

ふと、若園が視界に入った。なぜ顔がひきつっているのか、分からなかった。

「どうした?」

「え! あ、ああ。その、何か不満でもあるのかと思って……。ご、ごめん!」

謝る若園に、弓川はきよとんとした。

「お前、すげー顔してたぞ」

と、隣の犬巻。

そうなのか、と一応の納得をして、弓川は謝った。

「そ、それじゃあ、二人にはまず自己紹介をしてもらおう」

応、と言って弓川は一步前に出た。

「弓川一矢！ ポジションはFW、MF。しばらく運動もしていませんが全力で戦います。よろしく願います！」

続いて、犬巻が歩み出る。

「1年、犬巻力です！ もともと野球やってたんで、サッカーは未経験です！ あ、でもルールは覚ええました。ゲームで！」

弓川はずっこけ、他のメンバーからは、一部を除いて啞然とされた。

「お、お前なあ」

「大丈夫だって。手で触っていいのはGKだけ、だろ？」

「ま、まあ……遊びながら覚えられるなら良いんじゃないかな」

若園は笑って取り繕う。

「じゃあ、改めて……若園翔だ。ワカノシヨウキャプテンと部長を兼任してる。ポジションはMF。

うちに来てくれてありがとう。二人とも、よろしく」

そう言って、それぞれ握手を交わした。

笑ってはいいるが、眉は苦勞と自信の無さを表すように垂れ下がったままだった。

「次アタシな！」

元氣よく出てきたのは、部活紹介で若園の背中にビンタを食らわせた、あの少女——  
姉久保だ。

「アタシは3年の姉久保胡蝶。<sup>アネクボコチヨウ</sup>ポジションはFWだ。ソンケーをこめて、胡蝶先輩って呼ぶんだぞー！」

姉久保は、弓川と犬巻の肩に腕を回し、いたずらっぽく笑う。

その後は顔見知りのDF岐山、同じくDFの桐葉と続き、強風で転がされた少女が3年生の挨拶を締めくくる。

彼女が桐葉の隣に並ぶと、サイズの差がより顕著で、親と子にしか見えなかった。

「あーしはにえ、わちやぐ、わたぎゆ……えありらよ！ よろしくにえー」

犬巻がぼかんと口を開ける。

「え、ええと、彼女は綿雲えあり。MFとDFを務めてる」

若園が翻訳して伝えた。

犬巻は弓川と顔を見合せ、肩をすくめる。

続いて2年生。こちらにも、ひときわ威勢の良い少年がいた。

「おう！ 俺様は、2年の鹿乃村壮馬だ！<sup>カノムラソウマ</sup> 中盤を任されてる。中盤はチームの要――

だよな、キャプテン？」

若園は頷いた。

すると鹿乃村は、弓川と額がくつつきそうなほど顔を近づけ、低く唸った。弓川はそれに動じず、鹿乃村の鋭い目をまっすぐに見つめ返した。

「……は！ いい度胸じゃねえか」

「どうも」

「だがいいか!? ここでは俺様が先輩で、おめーは後輩。そこんところ忘れるなよ!」

ふんぞり返る鹿乃村に、弓川は呆れた。奥に居る青い髪の少女も、腕を組んで細いため息をついている。

「ちなみにな、コイツがサッカー始めたのは去年からだぜ」

姉久保は、弓川に耳打ちするような仕草をとったが、わざと聞こえる声量で言った。

「あんただって中学に入ってから始めたじゃねーかッ!」

鹿乃村が目を三角にして飛び掛かろうとしたところを、桐葉が羽交い締めで制す。

じたばた暴れる鹿乃村を尻目に、くせ毛の少年が微笑を浮かべながら、ゆらりと出てきた。

「どうも。2年の生ナバタメシユウマ天目秋真です。FWですがMFもやりますです。よろしく」

弓川は差し出された手を握り返す。ふと、生天目の顔をそれとなく分析してみた。

唇の端を引っ張り上げてはいるものの、目に表情が無かった。口元だけ別の人間から切り取って貼り付けたような、ちぐはぐな印象を受けた。細い目が、胡散臭さに拍車をかけている。



弓川は、童話に出てくるようなずる賢い狐を思い浮かべ、生天目に重ね合わせていた。

「まさか、神嶋ユナイテッドジュニアの元キャプテンに出会えるなんて。こんな光栄なことはありませんですよ。ええ、本当に」

抑揚のない声に加え、無理矢理に丁寧な言葉を使う。弓川は胡乱な目を向けた。

「……あ。胡散臭いと思っっているですね？ あはは、別に構わないですよ。ともあれ、今後ともお願いします」

生天目は一礼すると、違和感満載の笑みを絶やすことなく犬巻にも挨拶をした。

「荒木ちゃん。次、あんたの番だよ」

奈落馬は錆びたパイプ椅子に背を預け、顎をしゃくつた。荒木ちゃん、と呼ばれた青い髪の少女は、むっとした表情で奈落馬に振り返った。

「なんで」

「別に後でも構わないでしょー」

「私が先に名乗る義務だって無い」

弓川は、二人の間に火花が散る音が聞こえた——気がした。

そこへ若園が仲裁に入り、なんとか荒木の説得をする。彼女は面白くなさそうにため息をつくとき、弓川と犬巻に向き直った。

碧眼が二人を見上げる。つり目がちの顔立ちで、口の端からは鋭い歯が覗いていた。彼女には、頑として人を寄せ付けようとしない雰囲気があった。

「……2年、荒木薫アラキカオルよ。ポジションはMF」

それだけ言つて、荒木はさつきと引つ込んでいく。

早々に出番が回つてきた奈落馬は、椅子から立ち上がることもなく、頭の後ろで手を組んだ。

「奈落馬阿鶴ナラクバアツルねー。見れば分かるだろーけど、いちおうGKやつてるよー。よろしく」

すると奈落馬は、自身の背後を見やった。

「ほら。最後だよ、千博」

長い黒髪の少女が、ロッカーの陰からおずおずと出てきた。見ている側が窮屈に感じるぐらい、肩は縮こまっていた。目元まで伸びた前髪が、表情の認識を困難にしている。

「ちわす」

弓川が挨拶すると、少女の肩が跳び上がった。早口で何かを言つてぺこぺこと頭を下げたが、弓川には聞き取れなかった。

見かねた奈落馬が少女の肩を抱くと、少し安心したようだった。

「こんにちは……。2年生の奥枝千博オクエダチヒロです……。ま、マネージャーをやってます」

すると奥枝は、俯いたままゆっくりと弓川に近付き、口を開いた。

「神嶋ユナイテッドFCジュニアの弓川一矢選手ですよね初出場の試合は陽立<sup>ヒタチ</sup>SC戦でベンチスタートでしたよね現地で見たので覚えてます小学生離れしたキック力とFWながら泥臭く献身的な守備が印象的でしたどこまでも激しくボールを追いかけ強烈なシュートを叩き込む闘争心の塊のようなプレーは観る人全てを惹き付けました」

先ほどと打って変わり、雨あられのようにまくし立てる奥枝の豹変ぶりに、弓川は面食らった。その後も、奥枝は息継ぎすることなく続ける。

「ベンチスタートが続いていましたが決して腐らずに成績を残したのはまさにプロそのものでしたサッカー選手いえアスリートたるもの斯くあるべきという姿勢を」

「はい、そこまで」

奈落馬が手を叩くと奥枝は、はっとしたのち顔を真っ赤に染め、奈落馬の陰に収まった。

「あの、奥枝先輩はいつたい……」

と、犬巻。

「この子ね、超がつくぐらいのサッカーオタクなの。サッカーの話するときにはビビるくらい喋るけど、そのうち慣れるよ」

奈落馬は奥枝の頭に手を置く。奥枝がこそばゆそうに体を揺らした。

「ま、悪い子じゃないからさ、仲良くしてやってね」

はあ、と犬巻は気の抜けた返事をした。

「じゃあ、自己紹介も終わったことだし、そろそろ練習しようか。着替えたらアップして、シュート練からだ」

若園が一声かけると、女子たちは部室の一角にある更衣室へ消えていった。

残った弓川たちも制服を脱ぎ、ジャージに着替える。

手早く終えた弓川はシューズを履く前に、右脚にサポーターを巻いた。不安を取り去るように、しっかりと巻きつけた。

☆

外に出たイレブンは準備体操を行ってから、ひとかたまりになってピッチの外周を走る「ランニング」に入った。

弓川は、神嶋ユナイテッドでも練習前にこうして走っていたことを思い出した。

体が温まってきたところでランニングは切り上げられ、束の間の休憩を挟む。

ふと、古びたバスケットからボールを取り上げた弓川は、まじまじと眺めた。

(へえ……)

これから使うのが勿体無いほど、ボールは手入れされていた。他のものも気になって見てみたが、いずれも同じだった。

「ど、どうした弓川？ また気に食わないことでもあるのか？」

若園が声を掛けてきた。弓川は微笑みを返し、頭を振った。

「いや、なんでもない」

休憩を終えると、ボールタッチの練習を行うため二人一組に分かれることとなった。

「犬巻、俺と——」

「おい犬巻！ 俺様が組んでやるよ！」

犬巻と組もうとした弓川は、強引に割り込んできた鹿乃村に権利を奪われた。当の犬巻も、弓川に対して申し訳なさそうな表情を送った。

弓川は諦めて他の相手を探したが、若園は姉久保と、岐山は桐葉と、綿雲は生天目と組み、奈落馬は奥枝に手伝ってもらっていた。

必然的に残った荒木のもとへ、弓川は向かった。

「荒木先輩、お願いします」

ふい、と背かれる。青い髪が揺れると、花のような柔らかい匂いが弓川の鼻腔をくすぐった。

「あの……」

「なによ」

「なによ、じゃなくて。やりましょう」

荒木は振り向かない。

これほどつんけんな態度をとられる覚えは、弓川には無かった。怒りが込み上げてきて、眉間が熱くなる。しかし荒木を怒鳴りつけるわけにはいかず、ましてボールに八つ当たりするなど弓川にとつては言語道断。仕方なく弓川は、荒木の足元にボールを転がし、新しいものを持ってきて一人でタツチの練習に取り掛かった。荒木もまた、ひとり黙々と取り組んだ。

その様子を横目に捉えた若園は、ため息をついていた。やがてチームはシュート練習に移行した。

順番が回つてくると、弓川は少しの不安と緊張を背負いつつ位置についた。

合図を送り、若園とのワンツ一からターン。蹴りやすい位置にボールをコントロール。踏み込み、右足を鞭のように振り抜く。芯を捉えたシュートはゴール右隅に深々と突き刺さった。それまで全てのシュートをストツプしていた奈落馬だが、飛び付くことができなかった。

右足に残る感触に、弓川の胸が懐かしさで満たされる。

「おー、こわ。案外錆び付いてないみたいじゃん」

奈落馬は口元に薄笑いを見せた。

「頼むぞ弓川ー！」

列の最後は犬巻。

合図をもらった弓川はボールを受けてリターンパス。犬巻は身を翻し、勢い良く左足を振った――が、盛大に空振りした。

その瞬間、弓川の背中に冷たいものが走り、総毛立った。バランスを崩して背中から倒れた犬巻に急いで駆け寄る。

「大丈夫か!？」

「え? 大丈夫だけど……」

けろりとした顔の犬巻に、弓川は胸を撫で下ろす。

全国大会決勝戦前、最後の練習でのことだ。グラウンダーのクロスにダイレクトで合わせようとしたが目測を誤り、空振りしてしまった。その瞬間、右脚が千切れるような激痛が迸ったのを弓川は覚えている。連日の酷暑に加え、強豪のキャプテンであること、そして大会10連覇という重圧が弓川を蝕んでいたのだった。

たった今、その状況がフラッシュバックしたのだ。

「ちゃんとボールを見てミートさせろ」

「おう。わるいわるい」

犬巻はけらけらと笑った。

☆

陽が傾き、肌を撫でる風が冷たくなってきた。若園が練習終了の号令をかけると、修應サツカー部は用具を片付け始めた。

カラーコーンを持って倉庫に向かった弓川は、裏手に人の気配を感じ取った。幽霊や怪奇現象の類は一切信じない彼だが、薄暗い倉庫という状況が気味の悪さを醸していた。

そんなことを気にしていても片付けは進まないの、弓川は大股で入っていった。

「……はああ」

ため息。

「なんで私って……うう……」

（荒木先輩……?）

弓川が思い浮かべた彼女は、無愛想で、口を開けば悪態をつく——という人物だった。ところが、トタン越しにかすかに聞こえてくる声とイメージが一致しなかった。

「今年こそはって思ってたのに……悪化してるじゃないのよお……」

弓川はなんのことだろうと思いつつも、泣きそうな声を聞くうちにいたたまれなくなってきた。意を決して、声をかけてみる。

「あの……荒木先輩？」

「ひゃ!？」



幽霊にでも話しかけられたような反応が返ってきた。

「大丈夫すか？ 誰か呼んできましようか」

「べ、別に。余計なお世話よ」

平静を装おうとしているが、声の調子は明らかに動揺していた。

「そうすか。すみませんでした」

弓川も詮索はしなかった。カラーコーンを所定の位置に片付け、倉庫を後にした。やがて片付けが済むと、荒木も戻ってきて、修應中サッカー部は部室で挨拶をして解散となった。

あの夏からおよそ9ヶ月ぶりの練習。弓川は、なんともいえない高揚を感じていた。

「意外と難しいもんだな、サッカーって」

着替えていると、犬巻がひとりごちのように言った。

「大丈夫だ犬巻！ 俺様がしっかりみっちりサッカーを教えるからな！」

鹿乃村は犬巻の肩を叩き、豪快に笑った。

「若園。地区予選はいつやるんだ？」

その傍らで、弓川は若園に問うた。

「ええと……1ヶ月後だよ」

1ヶ月。あっという間に過ぎていく時間。地区予選と県大会を制し、全国の強者たちを退けて頂点に立つためには、1秒とて無駄には出来ない。

厳しい戦いが待ち受けていることは、明白だった。

と、その時。弓川のスマートフォンが着信を知らせた。画面には火村の名前があった。弓川はブレザーを羽織り、外へ出てから応じた。

「急に電話してすまねえ。話したいことがあつてさ」

「大丈夫だ。こっちはさつき終わったところだ」

「あ、そうか。なら良かったぜ」

「で？ 話したいことつて？」

「このまえ聞き忘れたんだけどよ、なんて学校に入ったんだ？」

「修應中つてとこだけど……」

弓川が言うと、火村は喫驚の声を上げた。

「そこつてサッカー部無いんじゃないか!？」

「あるんだよ、それが」

「マジか……。と、とりあえずそれなら問題ない」

「どういふことだよ」

「近いうちに——そつちと練習試合をしようと思うんだ」

## 第5話 始動

昼休みに入ると、弓川と犬巻は姉久保に誘われて屋上に向かった。そこにはサッカー部の面々が輪になっていた。部を立ち上げて以来、誰とはなしに集まって昼食をとるようになり、今に至るのだという。

ふたりが輪に混ざると、荒木がおもむろに小さな紙袋をそれぞれ差し出した。

「……入部祝い」

ふたりはきよとんとした。

「受け取りなさい」

荒木の声の調子と目付きがいつそう鋭くなったので、ふたりは慌てて紙袋を受け取って礼を言う。そして家に帰ってから開けるように、と念を押される。昨日の態度といい、つくづく不思議なひとだと思わされる。

それからは各々弁当をつつき、談笑を交わす和気あいあいとした時間が流れる。すると、桐葉が思い出したように手を叩き、大きな——しかし彼が持つといくぶん小さく見える——タッパーを取り出した。それを見た姉久保は待つてましたとばかりに飛び付いた。

蓋を開けると、味噌の甘辛いにおいが立ち上る。詰められていたのは、綺麗なあめ色に染まった豚バラと大根。それらを姉久保が次々と口へ放り込み、恍惚の表情を浮かべながら白米で追い込んだ。弓川と犬巻も、桐葉に勧められて箸を伸ばした。

口に入れると、肉と大根がほろほろと溶けた。コクのある味が口内を満たし、豊かな香りが鼻を抜けていく。姉久保が白米をかきこむのがよく分かった。

他の部員たちも舌鼓を打つ。

「めっちゃ美味いですよ、桐葉先輩！」

犬巻は自分の弁当のおかずそっちのけで食べている。

「桐葉先輩のお母さん、料理上手すね」

何気なく言った弓川の言葉に、桐葉はもじもじと大きな体を揺すった。

「どうしたんすか？」

「実はこれ、僕が作ったんだ」

弓川と犬巻の箸がぴたりと止まった。ふたりは思わず桐葉を見上げた。

弓川は申し訳ないと思いつつも想像できなかった。中学生離れた巨漢が台所に立ち、包丁を握って繊細な仕事をこなしている姿が。

「桐葉くんの腕前はプロレベルにやのよー！」

綿雲が囁し立てると、桐葉は顔を紅潮させ頬を搔いた。

(人は見かけによらずってやつか……ううむ)

心のうちで唸りながらも、箸が進む。

「昨日の帰り際、誰かと電話してたよな」

「ああ」

「それ、誰なんだ？ ……あ、いや。答えたくなかったらいいんだ」

言いかけて、弓川は言葉を飲み下した。

火村からの電話。その内容を伝えれば、若園たちが混乱するのは目に見えていた。

——近いうちに、そつちと練習試合をしようと思う……。

しばし葛藤したのち、意を決して口を開いた。

「神嶋ユナイテッド時代の仲間だよ。今は神嶋学院にいる」

「へ、へえ。すごいな」

「近々うちに練習試合を申し込むつもりだと言ってた」

若園が麦茶を盛大に吹き出した。その向かいに座っていた弓川は、その飛沫をもちに浴びてしまった。一同が呆然とするなか、姉久保はげらげら笑い、若園の顔はみるみるうちに青白くなっていく。

「(ゴ)っ、(ゴ)めん！」

「だ、大丈夫だ……。すぐに言わなかった俺が悪い」

弓川はハンカチを取り出して、飛び散った麦茶を拭った。

彼には懸念があった。チームを混乱させてしまうのではないか、もし試合を行って負けたら、完全に戦意を失ってしまうのではないか——という懸念である。

「そりえにしても、相手が神嶋学院にやんで……」

そうつぶやいた綿雲の声は、少し震えていた。呼応するように、部員たちは困惑と狼狽の色を顔に滲ませた。

「決まってもないのにオロオロしたってしょうがないでしょーに」

そのなかにあつて奈落馬は卵焼きを咀嚼し、飲み込むと言葉を継いだ。

「それに……県内に敵なし、日本一を争えるチームがうちの相手なんかしてどうするってーのよ?」

吐き捨てられたその言葉に、誰も反論できなかつた。

「弱いものいじめして喜ぶ悪趣味なチームじゃないだろうけどさ。……だいたい、そいつが戦いたいのもって弓川とでしょ?」

弓川は目を伏せる。奈落馬の言葉は的を射ている、と確信したのだ。

火村が見ているのはこのサッカー部ではなく、弓川ただひとり。

「ま、私はどっちでもいいけどね。あんただけはハッキリさせときなよ、キャプテン。申し込まれてもいいようにさ」

岐山に肘でつつかれたことで、若園は意識を取り戻すと、うなだれて考え込んだ。

「こ、断ったほうがいい」

そこへ桐葉が声を上げた。

「奈落馬さんの言う通りだよ……。僕たちなんかじゃ到底相手にならない」

「桐葉……」

「もう勝とうとしなくていいじゃないか……」

弓川は、3年生たちの横顔を見つめていた。

☆

この日、部室へ最後にやって来たのは若園だった。なにやら深刻な問題を引っ提げているような顔をしている。傍らにはワイシャツを着た中年の男が、ノートパソコンを脇に抱え、うざったそうな面持ちで立っていた。

「綿雲先輩、あの人は？」

弓川は綿雲のそばに行き、なんとなく小声で問うた。犬巻も寄ってきた。

「顧問の山本先生にやによよ。部活にはめったに来にやいんだけど……」

綿雲も小声で返した。彼女の言葉に弓川は眉をひそめる。

「ええと……揃ってる、かな？」

若園が口を開いたので、弓川は向き直った。キャプテンが薄暗い部室のなかを見渡

し、それぞれの顔を認めると、おそろおそろ続けた。

「みんなに報告があるんだ。その……」

歯切れの悪さに、弓川の胸のざわつきがいつそう強くなる。やがて、悪い予感確信に変貌していった。

「神嶋学院から……正式に、練習試合の申し込みが来た」

不思議と、どよめきは起きなかった。ある者らは質の悪い冗談を言われたような表情で顔を見合せ、ある者はやれやれというふうに首を振り、ある者は頭を抱えて震えた。

「本当ですか?」

聞いた生天目の口元は、いつものように不自然な笑みをたたえている。

すると山本がパソコンを開き、画面を弓川たちに見せた。一同は一斉に身を乗り出す。そこには神嶋学院中学校サッカー部監督の名前とその連絡先、そして練習試合を申し込む旨が綴られたメールが表示されており、本文には先方が希望する日程と会場も記されていた。

日時、再来週の日曜日——およそ2週間後の、午前10時。

会場、修應中グラウンド。

「私は断るつもりだが、それで良いね?」



山本はそう言つて、若園を見た。

「いや、あの……」

「——お願いします。断つてください」

弓川と若園は、同時に桐葉へ振り向いた。

「あ、あーしからも、お願いしますしゅ……」

綿雲も続き、深く頭を下げる。

「おいおいおい。なに弱気になつてんだよ、先輩！」

鹿乃村が飛び跳ねるように立ち上がった。桐葉と綿雲へ、いまにも掴みかかろうかという勢いだった。

「ただの練習試合じゃねーか！ ビビることなんて——」

「ほんと馬鹿……」

荒木がぼつりとこぼした言葉に、鹿乃村は血相を変えて詰め寄つた。

「てめー、もういつペン言つてみるやア!!」

「まあまあ、落ち着くですよ鹿乃村くん」

間に入った生天目は、相変わらず笑っていた。この状況を楽しんでいるような気さえして、弓川は不気味に思う。

「私たちが手も足も出ないことぐらい、分かるでしょ」

鹿乃村は何も言い返せず、きつく歯を食い縛って唸った。彼の脳裏に、過去の敗北が蘇ったのだろう。

「若園……どーすんだよ？」

そう言つて姉久保は、不安げに若園を見やる。若園は言葉に詰まり、ただ目を泳がせた。

岐山先輩は、と弓川は振り向いた。そこに、過剰なほどの自信をあらわにする岐山の姿はなかった。気まずそうな表情を浮かべ背を丸めているために、小柄な彼がさらに小さく見えた。

(……見たことがある)

神嶋ユナイテッドに入団したての頃のことだ。全国大会の県予選1回戦、対戦相手は格下のFC陽立。当時、彼らは5年近く白星をあげられずにいた。そんなチームとの試合をスタンドから観戦していた弓川は、彼らの表情を鮮明に覚えている。ピッチ上の選手たちだけでなく、ベンチや監督にいたるまで、みな諦めたような顔をしていた。結果として彼らは惨敗を喫した。わずかでも勝機を見出だそうとはせず、一方的に殴られて去っていったのである。

そして——あの夏の病室の窓に映った顔も諦めていた。逃げていた。

弓川の記憶と、目の前にいる若園たちが重なる。視線がぶつかったその時、弓川は眉

宇を引き締めた。

「やるぞ」

若園は目を見開いた。

「む、無理だよ！ 相手が悪すぎる！」

「だからなんだ？」

声を張った桐葉を射すくめると、弓川は言葉を継いでいく。

「そうやって目の前の勝負から逃げたら……自分から可能性を諦めちまったら、そこで終わるんだ。何もかも」

ひとつ間を置いて、続ける。

「俺たちがするべきことは決まってる。勝つんだ！ どんな勝負も真つ向から立ち向かう！ そして勝つ！ 勝てたらいいな、なんて思うな！ 勝たなきゃいけないんだ!!」

弓川は、息を切らしながら若園たちに、そして己に言葉を投げ掛ける。後悔してほしくないから。後悔したくないから。

「俺は信じてる！ あんたらが弱いはずがないってことを！ このチームで日本一になれるってことを！」

弓川には確信があった。彼らのプレーを見たわけでもない。それでも、信じるに足る

何かを感じ取っていた。

若園は目を閉じ、唇を噛む。肩が震えていた。彼の中で葛藤が起きているのは、弓川にも分かつている。しかし、部を守るなら、仲間のことを想うなら――。

若園が拳を握りしめた。そして、山本へ向き直った。

「神嶋学院との練習試合……や、やります！」

☆

弓川は湯を張ったバスタブに体を沈め、天井を仰いだ。

(……火村は)

どれほど成長したのだろう。弓川がやさぐれていた間も、真摯にサッカーと向き合っていた。

ライバルであり、友であったからこそ分かる。火村のほうがサッカーを愛している。

(だけど、悔やんでいる暇はない)

火村に追いつき、そして超えねばならない。血を吐き、骨を折つても。弓川は、いつも決意を固めた。

(そういえば……)

ふと、あることを思い出す。荒木から貰った紙袋だ。家に帰ってから開けるように

と、きつく言われた件の紙袋。

風呂から上がった弓川は髪を乾かし、部屋着に着替え、両親と夕食を済ませると、自室で紙袋を開封した。その中に入っていたのは、白い箱だった。不思議に思いつつ蓋を持ち上げると、口が狭く手のひらに収まるサイズの茶色の瓶、細い木の棒、そして折り畳まれた紙が収まっていた。瓶には液体が入っている。

弓川は紙を手にとって開いてみた。

「これはアロマ。瓶の蓋を開けて、スティックを挿しなさい。気分転換ぐらいにはなる」紙面でもぶつきらぼうなのは相変わらずだった。とりあえず弓川は文章の通りにならしてみた。

ほどなくして、静謐な森を思わせる爽やかな香りが部屋を満たした。ゆっくり、深呼吸を吸うと胸いっぱいになり香りが広がる。

（おお……いいな、これ）

人生初のアロマを体験した弓川は、安らかな気持ちで床についた。

☆

翌日の昼、サッカー部は屋上に集まらなかつた。その代わり、弓川と犬巻のクラスに若園がやって来た。空いている椅子を持ってきて座らせると、深く頭を下げてきた。

「決断する勇氣をくれて、ありがとう」

しかしそう言った直後、頭を下げたまま深いため息を漏らした。

「……負けたらどうしよう……。それより、みんなはどう思ってるんだろう……」

「姉久保先輩たちと話してないのか」

若園は小さく頷いた。

「聞くのが怖くて……。それに、姉久保たちも迷ってるみたいだからさ……。ああ、部室に誰も来なかったら……」

「大丈夫ですよ！ みんなついてきてくれます。たぶん！ それに、俺も練習試合やりたいんで！」

犬巻は、にかつ、と笑った。

「俺も負けたときのことを考えたよ。けど、そんなことに意味はないってあのとき思い出した。……若園。俺たちに本当に必要なのは、勝負から逃げないこと、そして勝つことだ。先輩たちだって、今のままじゃ駄目なことは分かっているに違いねえ」

弓川は付け加える。

「仲間と自分を信じろ。何があっても」

☆

弓川、犬巻、そして若園の3人は部室に向かう。職員室に部室の鍵が無かったことが

気がかりだったが、とにかく目的地に歩を進めた。その道中も、若園はぼやいていた。「先輩たちは必ず来る」

弓川はそう言い切ってみせた。

徐々に部屋が近付くにつれて、若園の顔色は悪くなっていた。そしてとうとう、部屋に到着。

「おい、死ぬなよ……」

「だ、大丈夫……大丈夫……」

ドアにかけて若園の手が震えている。弓川は深呼吸を促した。それに従った若園は、大きく息を吸い、ゆっくりと吐き出した。落ち着いたか、と問うた弓川に対して若園は、こくこくと頷いた。

若園は目をつぶり、一息にドアを引いた。その先にいた人物たちに、弓川は笑みをこぼした。

「——遅刻だぜ、若園！」

澆刺とした声が飛んでくる。若園は臉を持ち上げ、眼前に広がる光景に腰を抜かしかけた。

「み、みんな……!」

「ごめんな、若園。アタシたちが情けないばかりに……。でも! もう逃げねーって

決めた！」

「ああ。《ガラスの貴公子》が目を曇らせていたとはな。だが今、この目には一点の曇りもない！」

「弓川くんによおかげで、戦う勇気が湧いてきたによー！　ありがとうにやのよー！」

「僕も……もう少しだけ、頑張ってみるよ」

「どっちでもいいなんて言ったけどさ。かわいいう後輩がやる気全開なんだから、私ら先輩もただボール蹴ってるわけにはいかないでしょ」

「応ッ！　俺様の活躍っぷりを、日本中に轟かせてやるぜエー！」

「弓川くんには期待してるですよ。逆転の火種になり得ることを……」

「わ、私もいつしよに戦います……！　せいっぱいサポートします……！」

若園が俯きがちになり、制服の袖で目元を拭うのを弓川は背中から見ている。

「泣くにはまだ早いぞ」

「……ああ、分かっている。みんな、待たせてすまない」

若園は顔を上げる。彼にもまた、進むべき道が見えてきたのだ。

「修應サッカー部、始動だ！」



## 第6話 両軍見える

神嶋学院との練習試合まで、およそ2週間。修應中サッカー部は緊張をほらんで練習を行うこととなった。それにあたって彼らは、ミニゲームを中心に練習を組んだ。

ミニゲームの概要は次の通りである。

試合はハーフコートを使い、制限時間を5分、インターバルを1分に設定する。

続いて5対5に分かれ、攻撃側と守備側を決める。そして守備側には、奈落馬がGKとして加わる。攻撃側はボールを保持し、制限時間内に得点しなければならぬ。

サイドの交代は、ゴールが認められた時、奈落馬がボールをキヤッチした時、守備側の選手がドリブルでハーフウェイラインを越えた時、ボールがラインを割った時に行われる。

これらは弓川の提案によるものだった。チームの連携や展開力などの向上はもちろんのこと、彼自身の試合勘を取り戻すことも念頭においての提案だった。加えて、試合形式の練習をすることで、犬巻に実践的なスキルを身に付けさせる狙いもあった。一通りの説明が終わったところで、弓川たちは攻守に分かれた。

弓川は初め、守備側についた。メンバーは、綿雲、岐山、犬巻、生天目。

一方、攻撃側は桐葉、若園、荒木、鹿乃村、姉久保。

桐葉はセンターマークにボールを置くと、奥枝とアイコンタクトをとった。

「は、始めます!」

奥枝の笛で、両チームが一斉に動き出す。

「行くぜーっ!」

姉久保は桐葉からボールを受けると、弓川目掛けてドリブル開始。弓川もやや半身に構え、守備の体勢をとる。

上手い、そして不思議なドリブルだと感じた。軽やかさやタッチが細かいのはもちろんのこと、そのリズムが不規則で飛び込むタイミングが掴みにくい。長い脚から来る間合いの広さも相まって、迂闊に飛び込もうなどとは思えなかった。

距離が縮まっていく。すると姉久保は、シザースで弓川に揺さぶりをかけた。体を左右に揺らし、長い脚でもってボールを跨ぐ——そのダイナミズムに弓川は感動さえ覚えるが、すぐに気を引き締めた。

右、左と跨ぎ、右足が動いたその時、弓川は勝負に出た。彼は気付かなかったが、姉久保は口の端から歯を覗かせていた。

姉久保の右足がボールに触れる。アウトサイドで押し出されたそれは、突如方向を変え、踏み込んだ弓川の股を抜けていった。

(コンボだと……ッ！)

喫驚している間にも、姉久保はドリブルで持ち上がっていく。そこへ、鹿乃村のマークを捨てた生天目が横からスライディングタックルを仕掛けた。が、姉久保は左足でボールを引き寄せ、軽やかにルーレットを決めてみせた。あつという間の2枚抜き。

「パアース！」

綿雲を背負いながら足元へ呼び込む鹿乃村には目もくれず、ゴール右隅に狙いを定めて右足を振り抜く。と、スピードの乗ったボールに小さな人影が重なり、それをかつきらつていった。

「あー！」

「綿雲先輩！」

姉久保と犬巻が、同時に驚きの声を上げた。

「こつちだッ！」

荒木のマークを振り切った岐山が、右サイドを駆け上がってボールを要求。綿雲はちらと顔を上げると、姉久保と鹿乃村の間へ、ワンステップでボールを通した。

荒木が必死に戻るも、加速する岐山に届かない。ボールに追いついた岐山はそのまま桐葉をも置き去りにし、ハーフウェーラインを越えていった。

「だーっ、くそーっ！」

姉久保が地団駄を踏む。

「姉久保先輩！　なんで俺様にパスしなかったんだよ！」

鹿乃村もボールが来なかったことに腹を立て、姉久保に詰め寄った。

「だつてお前、綿雲にマークされてたじゃんかー」

「綿雲先輩なんてヨユーだつっの！　だいたい身長差が——」

「あー！　あー！　あーしのことみくびつてると痛い目にあうによよー！」

そんな三人の諍いは、奈落馬が手を打ったことで中断された。

「さっさと交代する！」

頭をひっぱたくように奈落馬が言うのと、三人は慌ててポジションにつき、間もなく弓川たちの攻撃が始まった。

初っ端から、鹿乃村が一直線に駆け出した。その目にはボールしか映っていない。

「鹿乃村！　……つたく」

奈落馬は頭を搔いた。

綿雲は右サイドに張る岐山へボールを預けると、至つて冷静に身を翻す。勢い余った鹿乃村は向きを変えようと踏ん張るが止まりきれず、砂煙の向こうに消えていった。

一方、ボールを受けた岐山に対して、生天目が下りていきながら足元へ要求。それを横目に見た弓川は、ワンツーでサイドを崩すのだと即座に判断し、桐葉の背後へ走り出

した。

判断は的中。岐山は生天目にボールを出すと即座に荒木の背後を取り、リターンをもらうと、スピードに乗ってサイドを深く抉っていく。

「岐山先輩ッ！」

弓川は姉久保を前に入らせないよう左腕で抑えながらP A内へ侵入し、クロスを呼び込む。

岐山の右足から放たれた低く鋭いクロスは、緩やかに弧を描いて桐葉を躲し、弓川の足元へ吸い込まれていく。

シュートの刹那、弓川はバランスを失った。それでも彼は足を振り、なんとかボールを叩いたが、その行方はクロスバーの上。勢い余った弓川のほうがゴールネットに突っ込んだ。

「派手にいったねー。大丈夫？」

「ありがとうございます」

弓川は奈落馬の手を取って体勢を立て直すと、すぐに守備側にまわって準備を整えた。

突破されたこと、シュートを外したことを事実として受け入れ、次こそはと弓川はさらに闘志を燃やした。

「ちくしょーっ！ 次はしよっぱなから俺様にくれっ、桐葉先輩！」

土まみれの鹿乃村も復帰。桐葉は困り顔で笑った。眺めていた弓川も顔を綻ばせる。インターバルが終わると、再び開始の笛が響いた。

☆

試合まで2日を残すところとなった。この日は練習を早々に切り上げ、ミーティングを開いた。神嶋学院戦の出場メンバーを決めるためである。とは言っても、きつかり1人なので全員がスタメンで出場することになる。そのうえポジションもあらかた決まっていたので、メンバーとフォーメーションについて簡単に確認をとった。

GK、奈落馬。最終ラインは右から岐山、綿雲、桐葉、犬巻。中盤は右から若園、弓川、荒木、鹿乃村。CFは姉久保、STに生天目を置く4-4-2で、神嶋学院を迎え撃つ。

犬巻はこの日までに全てのポジションを体験したが、SBに落ち着いた。「初心者がいきなりSBって、大丈夫なの？」

奈落馬の言うことは至極当然であった。近年のサッカーでは、SBの役割も多岐に渡るようになってきている。ただサイドを上下動するだけでなく、ビルドアップに参加したり、司令塔のように全体をコントロールしたり、果てには中盤の選手と化したり、といった具合に、総合力が求められる。

「大丈夫です！俺、遊撃手だったんで！」

しかし当の本人がそんな調子なので、奈落馬もそれ以上言葉を返さなかった。

「ゆ、弓川さん。犬巻さん。これを……」

呼ばれたふたりは奥枝のもとへ行き、丁寧に折り畳まれた青い布をそれぞれ受け取った。ポリエステルの感触が、弓川のなかに眠るものをくすぐる。

広げると、それは修應中サッカー部のユニフォームだった。裏には大きく20とマーキングされている。

数日前の昼、サッカー部が屋上に集うと、弓川と犬巻が着用するユニフォームの話題が上がった。奥枝はその場で彼らの採寸を行い、背番号の希望をとった。犬巻は何番でも構わないと言ったが、弓川は20番を強く希望したのであった。

「でも、なんでわざわざその番号を？」

若園が問う。

「初めて貰った番号なんだ」

弓川が初めて試合に出たのは、小学4年生の時だった。スタメンにもベンチにも入れずにいた彼だったが、全国大会決勝戦という大舞台でようやくベンチ入りを果たした。その際に与えられた背番号が20だったのである。

この番号はどのチームでも基本的にベンチの選手に与えられ、10番や1番のよう

な特別な意味はない。しかし、こと神嶋ユニテッドにおいては、伝統的にFW——と  
りわけ、スーパースブの選手たちが背負っていた。

ここぞという場面で活躍してくれる。流れを変えてくれる。

そんな期待が、この番号には込められていた。

件の試合だが、チームは予想外の苦戦を強いられた。驚異的な粘りを見せる守備に攻  
めあぐね、焦りから攻撃陣も精彩を欠いた。この状況を打破するために送り込まれたの  
が弓川だった。彼はチームを鼓舞し、走り、貪欲にゴールだけを狙い続けた。

そして最後の1分——フリーで受けた弓川は本能のままに右足を振り抜き、勝利をも  
たらしたのであった。

以来、彼はこの番号に強いこだわりを抱くようになり、スタメンに選ばれても、キャ  
プテンマークを巻いても背負い続けた。

「験担ぎみたいなもんさ」

そう言つて弓川は、しみじみとした気持ちでユニフォームを眺めた。

再び、この番号を背負つて戦う——。

そう思うと血が熱くなり、心が昂つた。

「俺は5番かあ」

その横で犬巻が、自分のユニフォームを見つめながら呟いた。



「やっぱ良いな、ユニフォームって」

犬巻は弓川に向き直り、笑顔を見せた。弓川も口元に微笑をたたえ、頷いた。

「い、いよいよ明後日か……」

若園の顔がみるみるうちに青白くなっていく。震える背中に、姉久保が手を添えた。

「いまさらビビってもしよーがねーぞ？」

姉久保は白い歯を見せた。それに後押しされたように、若園の表情も少し明るくなる。

「そうだな……。みんな、気を引き締めていこう」

☆

午前9時。試合開始時刻まで、あと1時間。

新たなユニフォームに袖を通すと、初めて試合に出た日がありありと思いきされる。いきなりチームの命運を託されるといふ緊張と責任感、デビュー戦が一番という興奮が入り混じって、ぐちゃぐちゃな感情のままピッチへ向かったのだ。

今もそう。廃部寸前の弱小チームを救わなければならぬという責任感と、復帰後初めての相手が前年のFF準優勝校という興奮があった。ゼロからのスタートというわけである。

とはいえ、若園たちがそんな心情ではないことも弓川は分かっていた。桐葉に至っては、集合してから一言も発さず、隅で巨大な背中を丸めていた。

ふと辺りを見渡すと、十数名の観客が認められた。なぜ、という弓川たちの疑問に、綿雲が答える。

彼女曰く、新聞部に友人がいるという。数日前、その友人に頼み込んで、ある新聞を発行してもらった。

——世紀の一戦！ 最強・神嶋学院、我が修應中サッカー部に挑戦状を叩きつける……！

そんな大見出しをつけて。

これには、少しでもサッカー部に関心を向けてもらいたいという綿雲の願いがあった。そしてあわよくば、転部を誘い部員を増やすという目論見もあった。

当初の予定では、新聞大作戦——彼女の命名である——で数百人の観客が来ることになっていたが、効果は薄かったらしい。とはいえ、作戦の第一段階は成功したと見て良いだらう。

(勝ちに行く……それだけだ)

情けないプレーはしない。いかに強大な相手でも、真っ向からぶつかっていく。いつだってそうしてきたのだから。

しばらくすると、校門から1台のバスが入ってきた。

若園は呑気にベンチで眠っている山本を揺り起こし、弓川たちを連れて駐車場へ向かう。

足を踏み出すと、心臓を締め上げられているような息苦しさを覚えた。呼吸に意識を注がなければ、今にも窒息してしまいそうだ。若園たちもそれを体感しているようで、額にじつとりと汗が浮かんでいた。

「どうしたんだ、お前たち」

ただひとり、山本だけが怪訝な顔をした。

この男には分からないのだ。弓川たちを苛む異様な空気が。

弓川は呆れて物も言えず、ただ歩き続けた。

やがて、駐車場に両陣営が到着した。

バスの乗降口がゆっくりと開く。すると、グレーのセーターと細身で黒いスラックスを身に纏った長身の男が降りてきた。

歳は60代ほどに見える。顔立ちは鋭く引き締まり、短く切り揃えられた白髪はいぶし銀に光っている。

男は山本の姿を認めると、歩み寄り、会釈をした。

「初めまして。神嶋学院サッカー部監督の斗舛と申します。お忙しいなかお時間を割い

ていただき、ありがとうございます」

どつしりとした品のある低音が、腹の底に響く。

「いい、いいいえ……」

これには山本も同じく圧倒されたようで、差し出された手を握り返し、何度も頭を下げた。

「やっと着いたーっ！ はやくサッカーしたーいっっ！」

叫びとともに、少女が紺碧の髪を靡かせて乗降口から飛び出してきた。

少女は大きく伸びをしたり、腰を回したりして体を解す。牛乳色の肌に、春の晴れ空をそのまま映したような、大きな瞳が輝いていた。

身長は荒木と大差ないだろうか。だが、弓川は錯覚を見た。目の前の少女が、何倍にも大きく――。

「あ。火村くんの言ってた弓川くんって、きみでしょー？」

びしっ、と指をさされてたじろぐ。

少女は子犬のように跳ねながら、弓川へ向かっていく。

「ボクは漣田<sup>ミオタナギ</sup>凧！ よろしくねっ」

「ど、どうも……」

漣田は弓川の手を握ると、すごい勢いで上下に振った。弓川はただ、なされるがまま

だった。

それから澤田は、若園たちにも同じように挨拶をしてまわった。爛漫な彼女に若園たちもたじたじだったが、そのおかげで場の雰囲気中和された。

そうこうしている内に、他の選手たちも下車してくる。

一目見て、弓川のサッカープレーヤーとしての本能が囁いた。彼らは強者だ、と。

幼き日に神嶋スタジアムで見た親善試合が、脳裏を過った。自信と誇り、闘志に溢れた彼らの姿が記憶と重なる。

なかには、弓川たちに見向きもせずスマートフォンとにらめっこしている者もいたが。

そこに、火村の姿が認められた。燃えるような赤い髪と瞳は、初めて出会ったときから変わっていない。しかし、纏う空気が明らかに違うことを肌で感じた。

はたと視線がぶつかったふたりの間に、無言のやりとりがあった。

選んだ道は違えど、共に戦った戦友。

言葉は無くとも、互いの心は通じている。

「――面白そうなチームね」

艶やかな若紫色のポニーテールが、かすかに揺れる。どこか神秘的な雰囲気を纏う少女は手短かに山本への挨拶を済ませると、若園へ一直線に向かっていった。

「初めまして。神嶋学院サッカー部キャプテン、3年の兎崎美咲トザキミサキよ。今日はよろしく、若園くん」

「(ト、ト)ちらいそ」

若園はおつかかなびっくり兎崎の手を握り返した。その瞬間、目が見開かれ、滝のように汗が吹き出るのを弓川は見た。

続いて兎崎は弓川のほうへ歩き出した。ゆったりとした足取りで向かってくる彼女の姿に、身震いした。

武者震いではない。認めたくはないが、認めるしかなかった。恐れていることを。

「それで……あなたが弓川くん」

「……ああ」

「活躍は知っているわ。怪我のこともね」

兎崎は瞬きもせず、深紅に煌めく瞳で弓川の目をまっすぐに見つめた。

こんなことで負けてはいけない。彼らは、超えていかなければならない存在なのだ。食おうとするなら、逆に食ってやる。そんな心意気がなければ、日本一にはなれない。まして世界一など、夢のまま終わってしまう。

静かに圧倒してくる兎崎を見つめ、もとい、眉間に力を込めて睨み返してやった。

嘗<sup>な</sup>めるんじゃねえ——。

兎崎は口元に不敵な笑みをちらつかせ、言う。

「ふふ……。どんなサツカーをするのか、楽しみだわ」

☆

両軍はそれぞれピッチに散らばり、アップに入った。

土を踏みしめる音、シュートの乾いた音、ネットの揺れる音、選手たちの息遣い。それら以外の音は響かない不気味なほど静かなアップを、十数人の観客も押し黙って眺めている。

弓川は足でボールを弄びながら、横目に神嶋学院サイドを見やった。

アップとして行っていることは、弓川たちとさして変わらない。しかし、足の振りやステップ、ボールの捌き方、歩き方に至るまで、動作のひとつひとつが洗練されている。それだけのことではあるが、「上手い」と直感する。

すると弓川のもとへ、火村が駆け寄ってきた。

「よう」

「ああ」

短い言葉を交わし、拳を突き合わせる。彼らなりの挨拶である。

「荷物持ちとして来たわけじゃなさそうだ」

「誰に言ってるんだ。てめーこそ、1時間もベンチあつたためるつもりじゃねーだろうな」  
憎まれ口を叩き合い、険しい顔で見つめて合っていたが、やがて同時に笑みをこぼした。

「20番のユニフォーム……やっぱりお前はそうでなくちやな」

「そつちは11番か。さすがだ」

精鋭ひしめく神嶋学院で、スタメンの座を勝ち取ったこと。弓川は、驚きはしなかった。

「ところで……よく試合を受けてくれたな。何か理由があるのか？」

火村はかぶりを振った。

「俺にも分からねーんだよ。うちのキャプテン、あんまり喋らなくてさ」

納得はいかないが、確かに、と弓川は思う。あの兎崎という少女が饒舌に話す姿を想像出来ない。

「つーかよう、右足は大丈夫なのか？」

火村は、サポーターを装着した弓川の右足に視線を落とした。

「サッカーが出来るぐらいには回復してるさ」

「そうか。……じゃあ、遠慮なくやらせてもらおうぜ」

挑戦的な笑みを浮かべ、火村は言った。



闘争心をくすぐるその顔も、変わっていない。

「お前が遠慮なんてしたことあったか？」

戦友との再会——。そんな胸の熱くなるシーンに、場違いな影がひとつ忍び寄ってきた。

「おうおうおう！ 俺様の後輩になんか用かア?!」

鹿乃村がふたりの間に割り込んできた。

肩を怒らせ、火村にガンを飛ばしまくっている。どう鼻肩目に見ても鹿乃村はチンピラそのものであった。

周りも何事かと、それぞれのしていたことを止めて弓川たちの方を振り向いた。

「あんたが鹿乃村さんスカ。俺は1年の火村ッス」

火村は笑みを崩さない。

「昔馴染みと話してただけッスよ。鹿乃村さんこそ何の用スカ？ 久しぶりの再会を邪魔しないでもらいたいわッスねえ」

「あア!?! おい火村とやら！ あんまり余裕ぶっこいてつと、俺様が叩き潰してやつからなア！」

「そうスカ。そんなときはお手柔らかに頼むッス。ま、俺たちのサッカーについてこれればの話スけど」

「い、えんどの……ッ!!」

火村の生意気な言動と態度は神嶋ユナイテッドの頃からあったが、実力主義のチームだったこと、そして彼の力が本物だったこともあり、大した問題にはならなかった。むしろ、誉められてたまるかど奮奮する者ばかりだった。弓川もそのひとりである。

とはいえ、人の神経を逆撫ですることには変わりない。

弓川は、掴みかかろうとした鹿乃村をすんでのところで羽交い締めにした。駄々っ子のように暴れる姿に、周りから失笑が起こる。

「……あ、そうだ」

何かを思い出すと、火村の笑みは影を潜め、戦士の目つきへと変わった。兎崎たちの纏う空気が、火村からも発せられる。

その迫力に圧され、鹿乃村は静かになった。

「俺さ、ひとつだけ許せないことがあるんだ。お前も覚えてるだろ。〃弓川がいれば違ったかもしれない〃……」

あの病室がフラッシュバックする。

鹿乃村を抑え込む腕に力を込めたまま、弓川は頷いた。

「お前がいなきや勝てないなんて思われることが、どうしても許せなかった! 同じFWとして、ツートップを組んだ相棒として、それだけが許せなかった!」

体の横で握りしめる火村の拳が、震えていた。

「同情も手加減もいらぬ。全身全霊でかかつてこい。俺は俺自身を超えるために、そしてお前を超えるために……全力で叩きのめす！」

力強く拳を突き出した火村に対して、弓川も鹿乃村の拘束を解き、拳で突き返した。

「ああ。望むところだ」

☆

「何を話してたんだ？」

少年——ネコサキフユト猫崎冬人の印象は、猫だ。

ユニフォームから伸びる、細くしなやかな四肢。つり上がった大きな目は黒目がちで、愛嬌と涼しさが混在していた。名は体を表すという言葉が、ぴったりと当てはまる。

「大したことじゃないっすよ」

猫崎はそれ以上踏み込もうとせず、

「そうか。まあ、気負わずにな」

とだけ返した。

するとそこへ、くすんだ金髪を後ろへすき上げた少年——3年の阿熊川アクマガワウモン于紋が忌々し

そうに言う。

「根性無しと友達ごっこか」

一瞬の間を置いて、火村は額に青筋を張りめぐらせ、殺気走った目で阿熊川を睨み付けた。

「……あんたに何が分かる」

「あ？ 事実だろうが」

一触即発。

このままでは血を流しかねないふたりの間に、坊主頭の3年——仙石泰基センゴクタイキが割って入った。

「やめろ二人とも！ 試合前だぞ！」

火村と阿熊川は仲裁に入った仙石を挟み、互いに食い殺しそうな目でしばし睨み合ったが、やがてそれぞれの場所へ戻った。

「まったく……。血の気が多いのはひとりで充分なんだがなあ」

仙石は頭を掻いた。

「そうですか？ ジブンは嫌いじゃないですよ、ああいうやつ」

外にはねた黒髪を揺らして言ったのは、2年の香良洲匡平カラスキョウヘイ。鉛色の瞳に火村の背中が映りこんでいる。

標準語のように喋ってはいるが、関東の抑揚ではない。彼が神嶋学院に来て1年経つが、仙石は未だ声を聞かずに耳の中を虫が這うような気味の悪さを覚える。鈍い光をたたえる切れ長の目も、奥底にある腹黒さを表しているようだった。

しかしそれを差し引いても、香良洲のプレーには信頼を置かざるを得ないことを、仙石は理解している。

「俺もカラスと同じだ！ ちょっと生意気だが、それに見合うだけの實力はあるし、努力だつてしてるぞ」

香良洲に賛同したのは、3年の二条銀士だ。ニジョウギンシ厚い胸板や逞しい大腿には、強豪のCFを張る者としての矜持を感じさせる。

「二条先輩。ジブンの名前は香良洲です。いい加減覚えてくださいよ」

「おお、悪い悪い！ “ジブヤ”と一緒に、だよな？」

「お前ら……」

仙石はがつくりと項垂れた。

少し離れたところでは、ひとりの少年が気だるそうにボールを弄びながら、スマートフォンを見つめていた。その横顔はひどく端正で、数人の少女たちが頬を染めていた。すると彼のもとへ、青みがかかった短髪の少年が歩み寄ってきた。

鼻梁は高く、そして鋭く伸び、眼窩が深く落ち窪んでいる。日本人以外の血が流れて

いても不思議ではない顔立ちをしていた。

「……夜鬼ヤキ。ずつと言おうと思っていたのだが」

「んー？ なによ、和泉サンイズミ」

夜鬼煌綺ヤキコウキは、画面から目を離さずに応えた。

「アップ中に携帯電話をいじるのは……」

「やめろってんでしょ？ でもさー、スマホいじってるほうがリラックスできんだよね。ほら、リラックスしたほうがパフォーマンス上がるんだっけ？」

悪びれもせず、平然と言ったのけた。

断っておくが、夜鬼は2年生。一方、夜鬼を諭そうとした和泉碧イズミアオは3年生である。

その和泉は仏頂面でしばらく黙り込んだのち、

「……なるほど」

と、納得してしまった。

「つまり……緊張しているということか？」

「別に」

食い気味に答えられた和泉の目元に、ふつと影が落ちた。そこで夜鬼は振り向き、小憎たらしく笑った。

「怒った？ ごめんごめん。……てかさ。1点も取れないような弱小相手に緊張とか、

するほうが難しくね？」

それに、と夜鬼は付け加える。

「こんなチームならウチの二軍でも楽勝でしょって。なんでわざわざ俺たちが相手しなきゃいけないのさ」

☆

奥枝から集合の合図がかけられた。

火村に挑発されたことがたいそう癪に障ったらしく、怒りをボールにぶつけまくっていた鹿乃村を、弓川と犬巻は力づくでベンチに引っ張っていった。

そんな鹿乃村をよそに、奥枝はタブレットの画面を弓川たちに見せた。

そこには、昨年度FF決勝戦の神嶋学院のスタメンが表示されていた。

それが意味することを理解した一同は戦慄した。

今日、最も顔色が優れない桐葉の顔がさらに青白くなり、その足元はバランスを失った。幸い近くにいた姉久保たちに支えられ、事なきを得たものの、桐葉に回復の兆しは見えない。

落ち込む若園たちを見かねて、弓川が啖呵を切る。

「俺たちのやることはハナから決まってる。どんな相手でも、全力で勝ちに行くだけだ」

振り返った若園たちの目を真っ直ぐに見据えて、弓川は続ける。

「仲間のために走れ。仲間のためにボールを繋げ。仲間のために体を張れ！ミスは全員でカバーしろ！」

体の芯から発せられた熱が全身を迸り、体と心を熱く、激しく燃え上がらせる。その熱は伝播し、やがてひとつの猛火となる。

その懐かしい感覚を一身に受けながら、若園たちを鼓舞し続ける。

「目にももの見せてやるぞ！勝つのは俺たちだ!!」

修應イレブンは一丸となり、鬨の声を上げた。

——間もなく試合が始まる。

両軍はベンチを離れ、センターラインへ向かっていく。

「……弓川！」

呼び止められた弓川は、足を止めて振り返った。

視線の先で若園は何かを言おうとして、しかし口をつぐんだ。それからしばし俯いて、

「……なんでもない。行こう」

と、力なく笑った。



## 第7話 悪夢の30分間

「ただいまより、修應中对神嶋学院中の練習試合を始めます」

神嶋学院が事前に要請した審判団により、試合開始の宣言がなされた。

両軍のキャプテンがセンターラインを挟んで握手を交わした後、エンド決めのコイントスに移った。若園は裏を、兎崎は表を選択し、これに兎崎が勝利。キックオフの権利は修應が獲得した。

ここで、改めて修應中のスターティングイレブンを紹介する。

G K、奈落馬（背番号1）。

デیفエンスラインは右から岐山（背番号2）、桐葉（背番号3）、綿雲（背番号4）、犬巻（背番号5）の4バック。

2列目は右サイドに若園（背番号10）、左サイドに鹿乃村（背番号7）。センターは右に弓川（背番号20）、左に荒木（背番号8）。

前線は姉久保（背番号9）と生天目（背番号11）がツートップを張る。

対する神嶋学院のスターティングイレブンは以下の通りだ。

G K、カモリカザン神守華山（背番号1）。

デイフェンスラインは右から仙石（背番号5）、阿熊川（背番号4）、和泉（背番号3）、夜鬼（背番号2）の4バック。

中盤の底には香良洲（背番号6）、右 I インサイドハーフ Hに兎崎（背番号10）、左 I Hに猫崎（背番号8）。

前線は右WGに澤田（背番号7）、左WGに火村（背番号11）、頂点に二条（背番号9）のスリートップという4-3-3の布陣である。

センターマークにボールをセットした姉久保は、背後から容赦なく刺してくるようなプレッシャーを感じて首をすくめた。

主審が腕時計に目を落とした。そして両軍のGKに確認を取る。

ピッチに立つ選手たちだけでなく、これから起こることの顛末を見届ける観客たちも、息を凝らしてその時を待つ。

（始まる……）

主審が笛を咥え、高らかに試合開始を告げた。

弓川に向けてボールを蹴り込んだ姉久保の髪が、大きく靡いた。彼女の髪を揺らした風の正体を掴むのに、1秒もかからなかった。

前進する間も与えず、次々と雪崩れ込んでくる真紅の軍団。圧倒的なスピードと破壊力のハイプレスは、さながら嵐のようであった。

一瞬の硬直が命取りとなり、ボールをさらわれてしまう。

左サイドから中央のスペースに走り込んだ火村へ、二条が繋いだ。

火村はそのまま宙返りでボールを蹴り上げると、右足に炎を纏って自らも跳躍。空中でゴールを睨み付けると、炎は激しさを増した。

「《ドラゴンキャノン》ツ!!」

右足一閃。燃え盛る龍が咆哮し、炎が尾を引いて奈落馬へ襲いかかる。

彼女は果敢に立ち向かった。両腕を突き出し、激痛に顔を歪めながら、ゴールを割らせまいと奮戦した。

しかしそれも虚しく、激烈なシュートは奈落馬ごとネットを突き刺した。彼女の姿は、舞い上がった土煙の向こうに消えた。

あまりにも呆気なさすぎる失点。わずか10秒ほどの出来事だった。観衆も何が起こったのか理解が追いつかず、啞然とするばかりだった。

(あれが……必殺技……)

過酷な鍛練を経た者だけが会得できる、人智を超越した技。初めて目の当たりにしたそれは、離れた弓川の肌をも焦がすほどの威力と気迫だった。

降り立った火村はしばしゴールマウスを睨んだのち、喜びを頭にすることなく、ただ険しい面持ちで踵を返した。

「まだこんなもんじゃねえ」

すれ違いざまに火村は言った。

「阿鶴ちゃんっ！」

奥枝は救急箱を抱え、転びそうになりながらもベンチを飛び出して奈落馬のもとへ走った。弓川たちもその後を追う。

土煙が晴れていく。奈落馬は苦悶の表情で腹をおさえていた。

「容赦ない、ね、女の子にも……。ま、当然か……」

奈落馬は苦々しく笑うとボールを引き寄せ、よろよろと立ち上がった。そして、潤んだ目で見上げる奥枝の頭を撫でた。

「お、阿鶴ちゃん……っ」

「私は大丈夫だよ、千博」

奈落馬は埃まみれの顔で、気丈に笑ってみせた。

それから弓川たちに向き直ると、煤まみれのボールを拭って、姉久保の足元に転がした。

「な、奈落馬さん……」

「さっきのは桐葉先輩がついていかないよ。岐山先輩も一ー番から目を離さない。綿雲先輩もカバーに入って……。それと弓川。いきなりロストしちゃ駄目ですよーが」

桐葉に終いまで喋らせず、グローブをはめなおし、きつくテープを巻いた。そして、沈痛な表情を浮かべるイレブンを見渡して言う。

「次は止める。私の心配ならいらないよ。意外と丈夫だから。さ、戻った戻った」

弓川たちは顔を見合わせたのち、キックオフのポジションに戻っていった。

「ああは言つてたけど、あんなシュートを受けたら……」

若園は不安げに呟いた。

「立っているのも辛いはずだ。内臓や骨を痛めていなければいいが……」

それに答えた岐山も、緊迫に満ちた面持ちだ。

（出鼻を挫かれた……。けど）

ポジションについた弓川は、待機する神嶋学院イレブンを睨み付けた。

神嶋学院との力量の差は先刻承知している。火村との差も、目前で見せつけられた。それでも諦めるわけにはいかない。惨めな負け犬には二度と成り下がらぬと誓ったのだ。若園たちのために戦うと誓ったのだ。

何としても、勝つ——。

☆

試合再開。姉久保は一気に奈落馬までボールを下げた。これで猶予を生んだが微々たるものに過ぎず、修應イレブンは各所でマークされた。

D F陣は神嶋学院の両翼に抑えられ、センターの2人と生天目も中盤に張りつかれて  
いる。

そこでフリーになっている若園と鹿乃村を見つけ、奈落馬は前者を選択した。

若園は落下地点に構え、胸でトラップ。

前を向こうとしたところを見計らったように、火村、猫崎、夜鬼に取り囲まれてしまっ  
た。

「いったん戻せ！」

弓川は素早くポジジョンをとりなおしてバックパスを受けるが、またしても三方を囲  
まれる。たまらず左へ身を翻し、荒木へ横パスを送った。

荒木は眼前に迫る兎崎に鋭い視線を向けると、ボールをリフトアップし、さらに上空  
へ蹴り上げた。

「《アプローズフォール》！」

彼女が蹴り上げたボールは空中で青い花と化し、その花卉が群青の吹雪を巻き起こし  
た。

仰ぎ見る兎崎を躲して前進すると、無数の花卉が荒木の右足に収束し、再びボールを  
形成する。

突破された兎崎は、荒木の背中を目で追う。その目には嬉々とした光が宿っていた。

(荒木先輩も使えたのか！)

中盤を越えた荒木はボールを鹿乃村に託す。

足元に収め意気揚々と前を向こうとする鹿乃村だったが、仙石が素早く体を寄せて妨げた。すかさず兎崎と澤田も囲い込みにかかる。

「邪魔だコラアア！」

しかし鹿乃村は力業で包围を突破。左サイドを猛進し、前線を押し上げていく。神嶋学院DF陣もラインを後退させる。

中央へ視線を向けると、手を上げて呼び込む姉久保の姿が見えた。鹿乃村は一度ボールに視線を戻し、クロスの体勢に入る。

その時。視界の端から足が伸びてきて、ボールをタッチラインの外へ弾き出した。鹿乃村は咄嗟の跳躍でスライディングを回避したが、勢いあまって前方に転げ回った。

「センくん、ナイスディフェンス！」

澤田が飛び跳ねて称えたのは、仙石だ。

一度は抜かれたものの食らいつき、果敢なスライディングでチャンスを潰した。そのガッツに、観衆から拍手が起こる。

「くそっ！」

鹿乃村は地面に拳を叩きつけると、すぐさまボールを追った。

修應のスローイン。鹿乃村は正面の姉久保に向かって放り投げた。兎崎との空中戦は、上背の姉久保に軍配が上がった。

頭で落としたボールを弓川が拾うと、

「走れ若園ッ!!」

若園を縦に走らせ、右足のアウトサイドに引つ掛けた鋭いロングボールを蹴りこんだ。ボールはわずかに伸び、若園は足を伸ばしてなんとか収める。

体勢を整えて更に右サイドを抉ろうとする彼の目前に、夜鬼が割り込んできた。

「ぐっ……!!」

若園は前に出ようとすも、夜鬼が上手い具合に体を使ってそれを阻止する。そしてボールは、そのままラインを割ってしまった。

「おい夜鬼。ぬるいディフェンスしてんじやねえ。いつも言ってるんだろ」

GKの神守は、獯猛な獣を思わせる金色の瞳で夜鬼を睨んだ。

「あれでも積極的だけどお？ マイボールになったんだから良いじゃん」

夜鬼も臆することなく反論を繰り返した。

「てめえ……」

「試合中だぞ、二人とも」



ヒートアップするのを察した猫崎が仲裁に入る。

神守は不服そうに鼻を鳴らすと、ボールをセット。夜鬼もやれやれと肩をすくめ、ポジションに戻っていった。

「さあディフェンス！ きつちり守って1点返すよ！」

ゴール前から奈落馬が声を張った。

おう、と弓川たちは気を引き締め、守備に意識を集中させる。

神守のゴールキックは、神嶋学院の左CB・和泉に向けられた。彼はボールを受けるのと、前方のスペースへジョギングのようなスピードのドリブルで前進し始めた。神嶋イレブンはラインを押し上げ、入れ替わるようにして香良洲がDFラインまで下りていく。

不気味な余裕を伴って持ち上がる和泉に対し、生天目がプレスをかける。接近を感じた和泉はパスの体勢に入った。

彼の体は、進路の延長線上に陣取る猫崎に向いていた。弓川はそれを見て、素早く猫崎に体を寄せた。

そのとき弓川の様子は凍りついた。

和泉の左足から放たれた楔は、弓川と荒木の間を生じた大きな隙を通し、見事に打ち込まれた。

猫崎が追い討ちをかける。弓川のマークを外して二条からパスを受けると、ワンタッチで逆サイドに低く速いアーチを描いた。そこへ走り込んできたのは、濔田だ。

「犬巻ッ！ 綿雲先輩ッ！ 7番に当たれッ!!」

奈落馬は即座にポジショニングを修正し、二条のマークを捨ててでも濔田を止めるよう指示を飛ばした。

「は、はいっ!」

「と、止めりゆによよー!」

しかし濔田は、猛追する犬巻と綿雲を容易く振り切り、浮き球に向かって跳躍。

「いっくよーっ! 《シルフィード》っ!」

ジャンピングボレーで打ち出されたシュートは風の刃となり、甲高い風切り音を響かせながらゴールへ飛来する。

「《ブラックホール》ッ!」

奈落馬の突き出した右手に暗黒が生じた。シュートは吸い寄せられていき、双方の技が激突。奈落馬は衝撃に後退りしながらも、歯を食い縛って耐え凌いだ。

だが、光さえ飲み込む暗黒の空間にありながら、ボールの回転と勢いは死なない。

奈落馬はじりじりと押し込まれていく。そして——暗黒は、消滅した。シュートは彼女の手を弾き、ネットを揺らす。

試合開始から5分と経たないうちに、弓川たちは2点を失った。

「ナイスアシストーっ、ネコくんっ!」

澤田は猫崎に向かって、満面の笑みとともにビシツとサムズアップを決めた。猫崎も微笑で応えると、自陣に戻っていった。

「す、すみません! 俺……」

右手を押さえる奈落馬のもとに、犬巻と綿雲が駆け寄る。

「犬巻くんは悪くにやいのよ……。あーしが止められにやかったから——」

「傷の舐め合いなんてしてる場合じゃないでしょうが」

既に相当のダメージを負っているにも関わらず、奈落馬は飄々とした顔で手首を回すと、ボールを拾った。

「さっきのプレーは引き摺らない。次に集中する。いいね?」

犬巻と綿雲は小さく頷き、それぞれのポジションに戻った。

（くそッ……2点目か……!）

弓川は歯を噛んだ。

最後の砦である奈落馬も必殺技を会得していた。だが、それも破られてしまった。そのシヨックは、修應イレブンの戦意を大きく削いだ。

☆

弓川たちは、あらゆる作戦を講じた。

若園をオーバースラップした岐山がパスを受け、右サイドを駆け上がりとするも、夜のデイフェンスでボールをロストした。

火村は夜鬼からパスを受けると、プレスバックしてくる若園を悠々と躲して中に切り込み、得点を挙げた。

逆サイドの犬巻にも攻撃参加させたが、未だトラップやパスがおぼつかず、徹底的に狙われたため中止した。

それならばと、前線の2人が中央突破を狙う。

だが、荒木から縦パスを受けた姉久保は前を向くことが出来なかった。背後から伝わってくる殺気にも似た空気が姉久保を威圧し、萎縮させた。

たまらず右にボールをはたくが、兎崎がインターセプト。

「おい荒木ッ！ ぜってー10番止めるぞッ！」

「分かってるっ！」

兎崎が前を向くより速く、鹿乃村と荒木がプレスをかける。

ふたりを背に、兎崎は呟いた。

『《ホロウ・フオーク》』

狙いを定め、鹿乃村はシオルダーチャージを見舞う。ところが、兎崎を突き飛ばした

という感触を得られなかった。何が起きたのか、彼には全く分からなかった。

荒木も同じだった。悠然と向かってくる兎崎に対して、一步も動けずにいた。それでもなお、彼女の本能が自身の間合いに踏み込んできた兎崎を迎え討った。

その攻防を横目に見ていた弓川は、自分の目を疑う。

荒木が、兎崎をすり抜けた。

中盤を突破した兎崎は、二条にラストパスを送った。彼もそれに応え、必殺技《グレネードショット》でショートカウンターを締めくくった。

「何なの、今の……」

「俺だって分かんねーよ……」

呆然とする荒木と鹿乃村のもとに、姉久保が走ってきた。

「わ、わりーな、ふたりとも。アタシのミスで……。で、でもよ！ 次はちゃんとやっから、もいつかいボールまわしてくれ！」

姉久保は頭を下げる。荒木と鹿乃村は顔を見合わせると、それに応じた。

試合が再開すると、荒木が再び縦パスを通す。

「よしっ！ 行くぜアタシ！」

自らを奮い立たせ、姉久保は阿熊川に1対1を挑んでいく。

不規則なりズムのドリブルから左へのボディフェイクを仕掛け、足裏で巧みにボール

を操り、右に駆けた。

抜いた、と確信したその時。途轍もない衝撃が姉久保の脳を揺らした。平衡感覚を失い、あえなく地面に激突する。

だが阿熊川は歯牙にもかけない。奪取したボールを踏みつけて回転を起こし、宙に浮かせた。

「《デビルスマツシヤアーツ》!!」

テイクバックした右足に漆黒の剣を象ったオーラを纏わせ、ボールを薙ぎ払った。

空間を切り裂き、悪魔が叫喚する。

センターサークル内から放たれた高速のシュートに奈落馬は反応出来ず、失点を許した。

「球遊びがしてえなら独りでやってろ」

阿熊川は、姉久保とのすれ違いざまに吐き捨てるように言った。

その言葉が、彼女の逆鱗に触れた。

「何だところの野郎ツ!!」

観衆がどよめいた。

姉久保は今にも燃えそうなほど怒りをあらわにし、阿熊川の胸ぐらを掴み上げていた。そんな彼女の姿を、弓川たちは初めて目にした。

すぐに主審と両チームの選手たちがふたりを引き剥がしたので大事には至らなかつたものの、イエローカードが与えられた。

「青9番、赤4番。以後気を付けるように」

阿熊川はさっさと踵を返し、帰陣していく。姉久保はその背中を、ずっと睨み付けていた。

その後も姉久保は阿熊川に勝負を挑んでいった。時には裏への抜け出しで虚を突こうとしたが、強靱なフィジカルと俊足、高い守備技術の前に敗れ続けた。

前半15分。

生天目がボールをキープし、2列目から飛び出した弓川に託す。

「おおおおッー」

和泉が体を寄せてきたことに加え、距離もあつた。だが、反撃の糸口を掴みたい一心で弓川は右足を振り抜いた。

抑えのきいた鋭いシュートが、ゴール右隅に向かって伸びていく。が、しかし。

神守は横つ飛びにシュートをキャッチ。体勢を立て直すや否や、流れるようにサイドボレーで蹴り出した。それは、優れたFWの放つシュートさながらであつた。

ボールは唸りを上げて、フリーの二条へ。

強烈なロングパスを容易く胸で納め、振り向きざまに右手を振りかざした。すると、青いエネルギーに包まれたボールが、二条の足元でホバリングするように静止した。

それを連続で蹴り込むと、エネルギーは更に増幅。そして、雄叫びを上げながら止めの一発を叩き込んだ。

「《フォースロック》ッ！」

耳を聳する爆音と共に、強烈なシュートが発射された。

その軌道上に桐葉が立ちはだかった。彼は歯を食い縛って、衝撃に備える。

固いものと肉がぶつかる、鈍い音——。桐葉のどてつ腹に、深々とボールがめり込んだ。

弓川たちは、二条のシュートの威力に仰天した。桐葉の巨体を、意に介すことなく推進していく。

そして青い弾丸は、奈落馬さえもゴールに押し込んでしまった。

続く前半18分。インナーラップで切り込んできた仙石のミドルシュートを、奈落馬が辛うじてパンチングで弾く。ボールがラインを割り、この試合初めてのコーナーキックを神嶋学院が獲得した。

すると、阿熊川がゴール前まで上がってきた。

「……………桐葉先輩！ 4番について！」



「で、でも」

「いいからマーク!!」

すっかり萎縮してしまった桐葉をぶつけるのは酷だということとは、奈落馬も分かっている。それでも、修應イレブンのなかで阿熊川に対抗しうる可能性があるのは桐葉だけだった。

笛が吹かれ、猫崎がキックモーションに入った。

ゴール前にボールが上がる。落下地点に桐葉が構えると、阿熊川が強引に体を割り込ませてきた。

桐葉は何を思ったかそこから飛び退き、バランスを崩して尻餅をついた。

フリーとなった阿熊川は跳躍し、頭で合わせに行く。弓川もマークを捨て、阿熊川に体を当てた。

衝突の瞬間、地中深くに根を張った巨木に体当たりしたような錯覚をした。

(空中だぞ……!!? ふざけてんのか……ッ!)

弓川は弾き飛ばされ、一方の阿熊川は何事も無かったかのようにヘディングで叩きつけてネットを揺らした。

「おい」

阿熊川はしやがみこむと、桐葉を睨み付けて言った。

「図体ばかりデカい役立たずはな、味方が迷惑するんだよ。……とつとと消えろ、クズが」

無慈悲な刃が、桐葉の心をずたずたに切り捨てた。

その後、修應イレブンは守備陣が崩壊し、攻撃陣も完全に封じられた。反撃はおろか自陣から出ることも出来ず、ハーフコートゲームで一方的に叩きのめされ、20点という大差で前半を終了した。

「くそつたれがアアツ！」

ハーフタイムに入るなり、鹿乃村は溢れんばかりの憤怒をベンチにぶつけた。幸い、奥枝と山本はその直前に避難したため、大事には至っていない。

「なんなんだよッ！ なんだつてんだよクソオオツ!!」

鹿乃村は周囲の目もはばかり怒り狂った。

普段なら桐葉なり生天目なりが止めに入ったり、奈落馬が注意したりするが、もはや誰も動かず、口を開かなかつた。気力も体力も底をついているのだ。

顕著なのは岐山である。

倒れ込んだ彼は尋常ではない量の汗をかき、その顔は病人のように青白くなっていた。呼吸の感覚も極端に短い。

奥枝は、すぐに酸素吸入と水分補給を岐山に施した。

再三だが修應中に控えのメンバーはいないので、開始時のメンバーで60分以上を戦わねばならない。誰かが離脱するようなことがあれば、更に状況が悪化することは目に見えていた。

「ウチのサッカー部ってホント弱いね」

「デカイこと言つといて、この有り様だぜ。見てるこつちが情けねえ」

「おいサッカー部！ やる気ねえならとつと試合放棄しちまえよ！」

方々から非難の声が上がった。

「うるせーぞでめえらアア!!」

「……みんなの言うとおりだよ。もうやめよう」

桐葉の言葉に若園たちが振り向いた。

「こんなの惨めすぎるじゃないか……」

頭を抱えて震える彼の様子を見て、若園たちには返す言葉がなかった。

どうにもならない、圧倒的な力の差。

燃え盛っていた彼らの心の炎は、既に鎮火してしまっていた。

ただひとり、弓川を除いては。